

△史料紹介△

ブルム人民戦線内閣論の周りに (一)

平 田 好 成

『われわれの英雄主義と献身によってのみファシズムを壊滅したのではなく、最良の鋼、最良の戦車、最良の兵士たちによってファシズムを壊滅したのである。』

M S シゴルバチョフ『プラウダ』紙 一九八七年二月一四日

—

一九三六年六月のブルム人民戦線内閣の成立は、一九八六年の五〇周年記念である。例えば、J. Kergoat, *La France du Front populaire*. (Textes à l'appui. Histoire contemporaine) 415 p. 1986 : 11 (La Découverte, F) 等が、挙げられる。⁽¹⁾

マルクス主義研究所歴史雑誌 C H I R M は、『人民戦線の周りに』⁽²⁾ Autour du Front populaire という記念論文を集めている。二四号は、一九八六年一、二、三月である。それは、五〇年振りで回想されている。

第一の論文は、ミシエル・マルゲラーズ Michel Margatraz (I R M 編集委員) 『一九三五—一九三六年に共産党、経済、財政及び貨幣、『熱』と『寒』』である。

経済、財政及び貨幣政策の諸措置は、後程と同様に確かに一九三〇年代に——共産党の考察において決して最初の諸措

置ではない。諸措置は第二義的である。すなわち、諸措置は採用された一般的な政治的戦略から由来し、これらの固有な領域において戦略の適用を履行するように予定されている。共産党員たちは、従って経済もしくは財政に関してかくかくの技術的措置のため、特別な愛着を持たない。すなわち、共産党員たちの好みは、先ず第一に当時の彼らの行動を基礎とする、政治的分析に従属する。すなわち、特に、諸措置は、共産党員たちによって、社会政治的な諸勢力の關係に應じて可能である問題について、そして、特に、共産党員たちは、共産党が決定的な行動を行使することを考える、『大衆の動員』を訴える問題について、共産党員たちの評価に照らして理解される。そのように、共産党の経済及び財政政策の提案の研究は、提案が『寒さ』もしくは『熱さ』と判断された、すなわち、特に労働者の弱いもしくは強い動員で、時期に公式化される事実から考慮に入れねばならないようにわれわれに思える。われわれは、一九三四年末に、人民戦線の準備から、一九三六年末に、選挙の勝利を越えてまで進む、時期に関して研究に努力するように試みよう。

第一のテーゼは、共同綱領の失敗した第一の企て（一九三四年一〇月—一九三五年一月）である。

第一のテーマは、共産党の提案である。人々は、正確な方法で人民戦線の起源の年表を認識する。すなわち、前の雑誌は、特に共産党にとって新しい戦略の始まりを見る、一九三四年五月—六月の『転換点』について未刊原稿の要素を供給した。（C、H、I、R、M、一九八四年、一八号、特に、D「タルタコウスキー」によって分析された資料とR「マルテリ」の論文、参照）ドゥーメルグ緊急政令に基本的に反ファシズムの及び敵対的な内容で——、一九三四年七月二七日、フランス社会党との行動統一協定の署名の後、共産党指導者たちは、一〇月に、『中産階級』の表現である、急進党を協定に参加するように試みながら、同時に『共同綱領』として協定の内容において、そして協定の政治的土台において、協定を拡張するように提案するであろう。一九三四年一〇月九日、共産党はフランス社会党に『共同綱領』の計画を提案する。すなわち、ある著者たちは生活を最小限に見せた、すなわち生活を否定した、そしてある他の著者たちは何よりも社会党の起源を強調した、人民連合綱領の作成（念入りで作り上げること）の（長い）歴史の開始は、この時期から始まる必要がある。（特

に、Gillフランの色々な著作、彼の人民戦線史、パリ一九七四年(第二版)、とJ・モックの著作、特に、人民戦線史、パリ一九七一年、参照。) 共産党の提案は、本質的に、恐慌の犠牲者と判断された色々な社会的集団カテゴリーにとって直接の諸要求の名簿を含む。すなわち、提案は、緊急政令の廃止、週四〇時間制、労働者たちにとって安全及び保健に対する代表者たちの創設、負債のモラトリアム、農業災害に反対する保険、農民たちに対する小作料の再検討及び分益小作料の法令、小商人たちと職人たちに対する全体的な営業権の創立、『公益の大事業』の開始のように家賃のモラトリアム及び失業者たちに対して失業基金の一般化である。(C、H、I、R、M、一九八六年、二四号、付属文書Ⅱ、二六一―二七頁、参照。) それは、本質的に、統一労働総同盟によって支持された、そして大部分、フランス社会党によって受諾できる、理由は一九三四年五月のトゥールーズ大会から生まれた社会党の政綱の中で含まれた、諸要求である。(付属文書Ⅰ、二四―二五頁、参照。) 社会党員たちと違って、共産党員たちは『大財産について累進徴収』、五万フラン以上の大所得について追加租税によって、同じく国庫の提案の回復によって、大事業の融資を、そしてある予算の減少(特に軍需予算)を予測する。数日後、人々は、M・トレーズは急進党大会が開催される市、すなわちナントで、『パン、自由及び平和のため』、『広範な反ファシズムの人民戦線』に参加するために急進党員たちに訴えを發することを知っている。(C、H、I、R、M、一九八四年、一八号、参照。) まったく政治的同盟を反ファシズムの展望の中に要求の活動の場について集中しながら、そしてまったくこれらの要求に照応する諸措置の融資に必要な財政的諸手段を正確にしながら、政治的同盟を拡張することは、このように共産党の戦略である。平行して、要求行動を強化するように、単一の労働総同盟の中に労働組合統一の方に進むことは問題である。しかるに、一九三四年秋から、相違は社会党の考え方と爆発する。相違は、二つの題目にわれわれを照明するように見える。すなわち、先ず、投票前、一九三六年一月の人民連合綱領の中に含まれた妥協は生まれるであろうことは、これらの相違の解決に實際属する。次いで、この妥協の違った読み方を通じて、一九三六年四月―五月の国政選挙の勝利後、この綱領の適用について討論が生起することは、相違の維持に實際属する。

第二のテーマは、教育的な戦略に反対する闘争の戦略?である。事実、フランス社会党の戦略は、共産党の戦略に対立させる。すなわち、フランス社会党の指導者たちは、急進党員たちに内容を拡げるように避けるために、『構造的諸改良』によって同盟の内容を豊かにするように提案する。社会党の新ゲード主義の書記局(ポール・フォール、ジャン・バチス・ト・セヴラック Jean-Baptiste Séverac) に対して、大連盟の指導者たち(ノール県連盟のジャン・ルバ Jean Lebas) に対して同様に、行動統一は先ず『組織的統一』、すなわち『最も強い党によって最も強くない党の吸収』に対する先触れである。(『Jモック』『人民戦線』パリ、一九七一年、六九頁) フランス社会党の全国評議会は、一九三四年一月二四日、共産党の綱領案を拒絶する。共産党は、二つの労働同盟、労働総同盟と統一労働総同盟に対してこの基盤について提案した、共同の進め方のように。議論の時、Pフォールは十分な深くでない共同綱領の提案を判断したが、Jルバは『構造的諸改良』に対する共産党の敵対性を批判した。(『ル・ポ、ユ、レ、ル』紙、一九三四年一月二五日における報告、参照) フランス社会党の返事を認めるレオン・ブルムは、共産党の草案は『社会党の本質的措置を』含まないし、(『ル・ポ、ユ、レ、ル』紙、一九三四年一月二八日) 『資本主義の大独占の社会主義化』を含めて、トゥールーズの行動綱領を取り戻すことを不満に思う。(同上) その上に、社会党員たちは、組織的統一のため論議の基盤として、一九〇五年憲章を提案する。(同上) 相違は、一九三五年一月に、議論は途中で止める見地で、明瞭である。しかし、労働者諸政党間の討論は技術的ではないし、ただ経済的ではないし、あるいは財政的ではないし、討論は戦略的である。共産党は、一九三四年夏から一九三六年国政選挙まで、三つの要素に支えられた、本質的に反ファシズムの戦略に自分は忠実にあることを分かる。すなわち、一、統一労働総同盟の犠牲者たちの間に本質的に借りた、恐慌の犠牲者たちの間に動員に関する直接の諸要求の公式化。二、闘争を押し付けるため(特に労働組合統一のお陰で)『大衆の闘争』の組織化。三、これらの闘争の経験から中産階級に対して、急進党員たちに訴えの問題を提出する問題を拡大化。共産党に対して、綱領は従って先ず第一に動員に関するそして社会的要求の機能を持っている。たとえば、フランス社会党に対して、綱領は教育的な性格を飾らねばならないし、恐

慌の資本主義的な無秩序の中にある『秩序』を再建するように予定した、社会党の諸措置の正当性を納得しなければならぬとしても、教育的な戦略に反対する闘争の戦略、すなわち、対立は一九三五年夏まででも動かない。ある問題の中に、綱領の内容は、諸要求闘争の中で『熱して』到達すべき全体の目標として認知される。他の問題の中に、内容は同意を導かなければならない、分析の唯一の密着によって『冷たいままで』論証的な効力を持っている。この相違は、また統一の主導権を獲得するための闘争を反映する。すなわち、社会黨員たちは、彼らの『刻印』のお陰で『構造的諸改良』を闘争を自分のものにするを考え、共産黨員たちは、闘争の先頭に彼らの活動的役割に、彼らに当てる。不一致の言葉は、一九三四年秋から、従って二つの主要な問題の周りに集中した。すなわち、一、一九三五年夏まで、フランス社会党の若干の指導者たちによって、同じく『社会主義化』と呼ばれた、『国有化』の影響。二、共産黨員たちによって提案された財政諸措置の承認。

第三のテーマは、国有化である。国有化に関して相違は、一九三五年の初めに議論の目的で広く責任がある。中央委員会の討論の特に速記録を含む、マルクス主義研究所 I R M に保存された文書の検討は、セルジュ・ヴォリコフ Serge Wolikow によって前の雑誌において差し出された、共産党の分析のある程度の『動揺』の考えを明確にする。(『モリス・トレーズ研究所歴史雑誌』 C, H, I, M, T, 一七一一八号、一九七六年第三・四半期、一〇四頁、参照) 共産党の指導部は、一九三五年の間に、数多くの態度の中に振動することになる。年の初めに、議論は曖昧でない。すなわち、国有化は社会変革なしで実現できるし、国有化は伝達する幻想によって無益であるし、すなわち有害であるか、それとも国有化は有効である、しかし議事日程でない革命を意味するか。(『トレーズ』ボリシエヴィスム誌、一九三五年一月、参照) 理論的な立場は、コミンテルンの立場と一致している。だが、一九三五年初めから、戦略的レヴェルから、他の異議は、とりわけ統一労働総同盟の共産党の指導者たちの中に、現われる。すなわち、異議は労働総同盟のプランのずっと一般的な批判に似る。G. モンムソオーは次のように考える。すなわち、プランは『世論の現状』で実現できないし、プランは『要求闘争の放棄』

を捧げる。(『ポリシエヴィスム誌』、一九三五年二月、参照。)最近の雑誌は、中央委員会にB「ファッション」の現代の報告を提出した。報告の中で、中央委員会は、『プラン』と『構造的諸改良』は(労働者階級の)『この行動を妨げる心配で』鼓吹することを説明する。(C、H、I、R、M、一九八五年、二〇号、八一—九四頁、参照。)たとえ、『われわれは、逆に、プランと諸改良の諸要求を押し付けるため、唯単に大衆の圧力に数えられる』としても。(同上)共産党の指導者たちは、特に、『冷たいままで』行った国有化はただ欺瞞であることを恐れる。特に、もしも国有化は償却を許容するならば——それは、一九三四年初めから一九三五年九月まで、漸進的に入念に制作した労働総同盟のプランにおける問題であるように——、国有化は彼らの眼でただ資本主義の糊塗的手段であるに過ぎない。共産党の批判は、フランス社会党のランクの中で効果がなわけではない。フランス社会党のランクの中で、もしも計画経済論者たちのテーゼは一九三四年五月の大会で拒否されたならば、『国有化』あるいは『社会主義化』を無差別に呼ばれた、『構造的諸改良』への加担は、社会党ミリタンたち自体に対して混乱を失わなかった。すなわち、すでに革命的諸措置あるいは維持された資本主義の中で諸改良が問題であるのか。とにかく、袋小路は一九三五年の最初の数カ月の間に全面的である。^(三三)

第二のテーゼは、交渉の再開と綱領への進行(一九三五年六月—一九三六年一月)である。

しかし、人民連合委員会によって、一九三五年七月一四日のデモの準備は、共同綱領について交渉を再開すると同様に、一九三五年五月五日と一二日の市町村議会議員選挙に統一の圧力、少し後に——完全な貨幣恐慌の中に、フランダン政府の瓦解がある。市町村議会議員の選挙の圧力を延期するため、共産党の書記局は、フランス社会党に対して、フランス下院に左翼代表部の集会を召集するように提案する。フランス下院は、事実上共産党、フランス社会党、急進党及び色々な社会党の分裂者たちの議員たちを再結集する。五月三〇日(『ポリシエヴィスム誌』、一九三五年七月一日、七一八—七三二頁、)の中に、フロリモン・ポントによってこれらの事件を作られた通信、参照)、M「トレーズ」は、初めて、多数派に対する共産党議員たちの支持者が特に『金持ちたちと投機業者たちを襲い、失業者たちと貧乏人たちを軽減する綱領を適用する』ことを

希望すると同じように、共同綱領の作成を提案する。(同上) M「トレーズは、六月五日、東の間のブイソン政府の瓦解後、彼の提案を繰り返す。しかし、急進党の議員たちととりわけエドゥアール・エリオは、人民戦線型の政府の創設から、財政状況の悪化を恐れる。その上、社会党のグループは、グループが『基幹産業の国有化』を含む『労働総同盟が勧めた諸改良に類似した諸改良』を要求する、テキストを届ける。(同上) そのことは、急進党の拒絶及び共産党員たちのこの議会の法案発議権イニシアチブの失敗をもたらす。J「デュクロは、数カ月後、社会党員たちに公然と拒絶と失敗によって非難するであろう。しかし、若干の重要な指導者たち——P「フォール、J「ルバ、A「リヴィエール A. Riviere——のためらいにもかわかわらず、フランス社会党のミュールーズ大会は、『トゥールーズで入念に制作されたプラン及び労働総同盟のプランの土台について』『直接行動綱領』の設立を注目している、ヴァンサン・オーリオールによつて提案された『直接行動決議』に再び集まる。平行して、事務局は共同政綱に基礎になるように、労働総同盟の同盟事務局は、彼のプランを承認するため、そして万一彼のプランを改良するため、人民連合の各組織に訴えを差し向ける。労働総同盟の書記長である、L「ジュオーは、そのように疑いもなく、共産党の指導部を邪魔をすることを考えた。共産党の指導部は、この効果に予測された委員会におけるプランを議論するように受け入れながら、まったく基本的にプランを反対しながら、術策を巧みに避ける。(同じ時期に、G「ポリツェルは、H「ドゥマンを告発するために、『ポリシエ、ヴィスム誌』の中に数多くの論文を捧げる。)

同時に、中絶の六カ月後、議論は労働組合統一について労働総同盟と統一労働総同盟の間に再び始める。そのように、一九三五年六月末から、綱領の作成を目標として議論は、人々が常にフランス社会党と共産党の代表者たちを発見する、しかしそれらの相手は変化する、四つのはっきりした場所に展開する。すなわち、一、フランス社会党—共産党の調整委員会。二、労働総同盟のプランの議論委員会。三、全国人民連合委員会の委任。四、左翼の代表部。

第一のテーマは、受け入れられた国有化?である。われわれは、主な社会党の交渉役たちの一人、ジャン・ジロムスキーの文書におけるフランス社会党—共産党の調整委員会の討論の幾つかの足跡を見付けた。すなわち、J「デュクロは

共産党の代表部を指導した。Mittレーズと数多くの他の指導者たちは、前月以来コミンテルン第七回大会に参加する時に、交渉は八月末に終る。議論の時、両党の代表者たちは、六月の初め（第三の付属文書参照、二七—二八頁。）と労働総同盟のプランの後、統一労働総同盟によって提案された政綱の対決に取り掛かった。（ジジロムスキー文書に見された資料によれば。）一番討論を呼び起こした問題は、国有化であったし、共産党員たちによって提案された『大財産の徴収』であった。さて、六月以前の共産党の態度に反対して、デュクロは、国有化が社会主義化——公用徴収と区別されるということを明確にするという条件で、国有化を包括するように受け入れる。事実、数週間前に、レオンブルムは、『ポピュラー』紙の一連の論文の中で、革命的諸措置イコール『社会主義化』と、『ブルジョワジーの政治的中枢機関の先決すべき征服なしで理解し得るそして実行し得る』イコール『国有化』との間に差違を明確にした。（レオンブルムの著作（一九三四—一九三七年）、パリ、一九六四年、二〇三—二九頁、の中に再録した、『ポピュラー』紙の一九三五年七月一〇、一一、一二日と一九三五年八月二、三、四、六及び七日の論文、参照。）レオンブルムは、そのようにそこまで社会党の内部に討論において（考えた末かそうではないか？）維持された曖昧さを取り除けたし、共産党のためらいを拡大した大きな混乱の源泉を取り除けた。人々は、時折明確に社会主義化と区別された、国有化に対して共産党員たちの、真実である束の間である、この加担を引用するように省略する。しかし、彼のプランの研究のため労働総同盟によって立てられた四つの委員会において、共産党の代表者たちは、ジュオーがプランを願ったように、プランは人民連合綱領に入れ替わることはできないように、留保条件を表明する。数カ月後、J・デュクロは、コミンテルンのローマの書記の前に、同盟加入者たちの術策の失敗を報告する。すなわち、J・デュクロは、プランを人民戦線綱領に対立させるため、フランス社会党とともに協議された進め方として失敗を解釈する。すなわち、『七月一四日後、加入者たちは、労働総同盟の『プラン』を甘受させるように試みながら、大きな活動を労働総同盟とともに試みた。すべての一連の集会は、労働総同盟に対して開催した。加入者たちは、もちろん、われわれは目指さなかったであろう希望の中に、そして七月一七日後、われわれは孤立された

であろう希望の中に、そのことを作り上げた。われわれはそのことに目指したし、われわれはプランに対して激しい打撃をもたらした。』(C、H、I、R、M、一九七五年、二二―二三号、三一―三五頁) 一九三五年九月末に、もしも共産党の指導者たちは、フランス社会党とともに共同政綱の中に国有化を包括するように受け入れるらしく思われるならば、共産党の指導者たちは、労働総同盟のプランの完全な賛成を拒否する。従つて、L、ジュオーは、二四時間に、G、ルフランによつてプランの決定的なテキストを性急に編集させるし、テキストを修正しないでテキストを受け入れる、同時に労働組合再統一を決定するテキストを、テキストを労働総同盟の大会に委ね、そしてテキストを人民連合委員会の委任に綱領として提案する。

(G、ルフラン、前掲書、参照。)

第二のテーマは、税金問題である。税金問題は、一九三五年の今夏に、第二の論争の場として現われる。七月末に、共産党はそれらの税金提案を明確にした。すなわち、*五、〇〇〇万フラン以上に三%から二〇%まで進む割合の(五〇万フランより上の)『大きな財産について徴収』。*所得について独自の及び累進の租税。*年間の期間に評価された、財産の調査の設立の期待の中で、宣言された所得から設立された(一%から四%まで)、『大きな財産について特別の課税』。J、デュクロは、『金持ちを支払わせる』決まり文句のお陰でこのキャンペーンを發展させる。(『ポリシエ、ヴィスム誌』一九三五年八月一日、八四六―八五一頁) G、ポリツェルは、『所得税』のイギリスの実例を証言を求めながら、『ポリシエ、ヴィスム』誌の数多くの論文の中で、『共産党の』諸措置が問題ではなくて、恐慌のそして特に大事業の綱領の融資のため、投資の低下の状況に適合された政策が問題であることを証明する。(『ポリシエ、ヴィスム誌』一九三五年九月一日、一、〇三〇―一、〇五一頁) L、ブルムとV、オーリオールのような社会党の指導者たちは、同時に労働総同盟のプランについて委任の中で、そして調整委員会の委任の中で、ポリツェルに反対する。L、ブルムは、『たとえ困難は十分でさえ獲得した財産と大きな所得しか到達するであろう』(G、ルフラン、前掲書、四七五頁、の中に、引用)、そして逆に『困難は一時的に、赤字を増大しなければならぬが、精力的な税金の緩み』を勧める『でも、何らかの浅薄さを現在の状況の中で考える困難』で

試すことを告白する。一九二〇年代以来社会党の議会グループで税収問題の専門家たる、V・オーリオールは、同じく同じ方向に進む詳細な報告を許容する。V・オーリオールは、一九三二年以来発展された、フランス社会党のリフレ政策論者たちのテーゼを再び始める。テーゼによれば、『それは、財政的訂正、そしてそれ自体によって、諸個人の課税し得る所得を増加する訂正によって予算的均衡を準備するであろうし、また支持するであろう、経済的開始である。』（G・ルフラン、『人民戦線の経験』バリ、一九七二年、三九頁、のちに引用。）不一致は従って完全であり、政綱の署名を越えて貫く。しかし、政綱は妥協を是認するように見える。すなわち、共産党員たちは、『自由を守らねばならない』ことを欄に描く農業事務局と同様、国有化を受け入れた。すなわち、それに反して、社会党員たちは、不一致は『大きな財産を打ち、そして借金に保証をさせる諸措置の助けで融資した、共同利益及び社会利益の大事業』（第四の付属文書参照、二九—三二頁。）を言及されることを受け入れた。しかし、この妥協の影響力は単に束の間であった。なぜならば、人民戦線の他の構成要素として、急進党を含めて、協定の土台を発見する問題であったからである。人々は、綱領の作成のため人民連合委員会の委任の中で、議論を報告する資料について支えられ得ない。人々は、討論に進んだ議論の全体を復元するため十分に多様化していない、幾つかの証言を配置する。人々は、しかし一般的な政治的討論の中で、これらの議論の反響を見付けることはできる。最も重要な論争の主題は、国有化、融資の問題及び平価切下げであった。

第三のテーマは、国有化の拒否である。労働総同盟及びフランス社会党の代表者たちは、労働総同盟のプラン、特に国有化の中に含まれていた諸措置を着想を得るよう要求する時、拒否は同時に急進党員たちと共産党員たちから生じる、すなわち、『ひどく変わっている景気』と、ジュール・モックは書く。（J・モック、前掲書、八九頁。）人々は、報告の速記録の中に、M・トリーズはコミンテルン第七回大会後初めて集合した、中央委員会の前に一〇月一七日提出することを読む。すなわち、『全時期の間、人々は、酷使及びわれらの困難を考慮して、これらの問題について少々軽く言及した（・・・）。不幸に、われわれは、農業公共事務局の設立及びなお資本主義的大独占の国有化を含む、共同行動の政綱を署名するよう

に仕向けられていた。われわれは、従つてそれを修正し、われわれの不変の路線に戻るように仕向けられるであらう。』(IRM文書、七二六、五〇頁。M、ト、レーズ、著作、二卷一〇冊、三四頁)の中に公表されたテキストは、テキストの全体を繰り返さない。なぜ、この分析における動揺、及び政綱の用語を受け入れた三週間後この訂正があるのか。M、ト、レーズは交渉の全期間中モスクワに居た、及びM、ト、レーズは政綱の署名の三日後にしかモスクワに戻つたのに、交渉の責任者であるJ、デュクロの悪い解釈が問題があるのか。(一九三五年九月二八日の『ユ、マ、ニ、テ』紙によれば)それは、ヴァルガは第七回大会の時国有化に関して発表した、激しい批判の効果であるのか。政府綱領における国有化の存在の問題は、共産党の指導者たちにとって斬新である。共産党の指導者たちは、急進党員たちが武器取引の国有化だけ受け入れる一層、秋に急転直下結末に向かう、一九三五年夏に若干の繰り上げ審議命令を試みたように見える。それは、人々が一九三七年の初めからそれを確認できるであらうのに、しかし、問題は決定的に解決されない事実によつて証明する。実際に、国有化の拒否は体系的ではない。すなわち、拒否は、なおもつと多く、諸勢力の開始に必要な諸勢力関係の分析で依拠する。さて、国政選挙にまで、共産党の指導者たちの眼で、諸条件は集まらない。すなわち、『われわれは大きな工業及び大きな株主に無賠償のトラストの国有化の支持者であることを、われわれは言つたし、またわれわれは繰り返す。しかし、われわれはそれに味方することを断言する必要はない。国有化を大きな資本家たちに押し付けるため、諸条件は実現する必要がある。それは簡単である、それはそれによつて実は開始する必要があるということを言うことは、それは労働者たちの間に幻想を創り出すことである。財政の寡頭政治に取り除かない、それらの権力の極く僅かな金、小量を取り除かないであらう、いわゆる国有化の問題があるのでなければ』(B、フ、ラ、シ、ョ、ン)。(『ユ、マ、ニ、テ』紙、一九三六年一月一七日)この問題は、一九三五年一〇月に、反ファシズムの統一の圧力によつて支えられた、どんなに共産党は未刊原稿の問題について自ら疑問に思ふかを指摘する。その時、実は共産党は、コミンテルンの干渉後、共産党の伝統的な態度を発見する前に、政府参加の可能性を注目させる。(C、H、I、M、T、一九八〇年、三四号、五五—一〇七頁における、S、ヴォリコフの研究、参照)しかし、も

しも共産党の考察は国家の政治的局面に関する問題（議会の、政府の役割）について革新するならば、共産党の考察は、その経済的な機能、特に国有化に関係がある問題について多く少なく、国家を作る。すなわち、人々は、もちろんコミンテルンの内部にかなり隣りのずれを発見する。（C、H、I、R、M、一九八〇年、三四号における、コミンテルンについて指示された書誌、参照。）それはともかく、急進党及び共産党の反対の結合は、すなわち、『軍需産業の国有化と武器の民間取引の廃止』（『平和の擁護』の章に）及び『今日民間銀行Ⅱ、フランス銀行からフランス銀行を作る』ことを除いて、綱領から国有化を無視する。（第五の付属文書参照、三二―三五頁。）しかし、急進党員たちと共産党員たちの反対にもかかわらず、彼らの公のテキストの大部分の中に、『各業種間穀類調整局の設立』の綱領に登録を、農業事務局に対して強調しよう。（第五の付属文書参照。）一九三四―三五年に農業価格の崩壊は、急進党員たちの指導部たちの大半はそれまで拒否した措置に、急進党員たちを結集するように仕向けたようである。共産党員たちに関して、職権で社会党の提案は、共産党員たちの眼で、すべての社会党の救済にかなり頑固な全体として、農業界の中で同じ幻想の危険を代表しなかった。

第四のテーマは、融資について相違である。挑戦の第二の活動の場合は、一九三五年夏と同様、諸改良の融資の問題であった。社会党員たちは、彼らのリフレ政策論者たちの分析を維持し、本質的に公の財政を安定させるため、経済的回復について評価する。その間に、フランス銀行の借金もしくは前貸しに頼る必要がある。一九三五年一月の通貨危機の間、Lブルムは、明白に予算の一次的赤字の維持に注目する。共産党員たちが、同時にデフレ政策の支持者たち——急進党員たちの一部分の支持でもって権力の座にいる右翼——と、リフレ政策の支持者たち——フランス社会党と労働総同盟——を告発する。すなわち、『もしもデフレ政策論者たちは、経済問題の赤字の問題を切り離すもしくは切り離すように装うならば、『リフレ政策論者たち』は、赤字の問題を社会問題から切り離す。』（Gポリティツェル（『ポリシエ、ヴェイスム誌』、一九三五年二月一日。）、その理由は、共産党の哲学者が付け加える。すなわち、『経済恐慌は大きな原因であり、しかし単なる赤字の原因ではない（・・・）。繁栄への復帰は、従ってわれわれを赤字の問題から少しも取り除かないであろう。』

なぜなら、赤字の深い及び永続的な原因、すなわち、われわれの反動的な財政の体系は、生活を維持し続けるであろう。』(同上。』さて、人民連合経済委員会における共産党の代表者たち——そして代表者たちの間にG・ポリツェル——は、『すべて財政の緩みに賛同する、社会黨員たち、(労働総同盟) R・プラン及び急進黨員たちの結合された反対に対して『衝突する』。決定的な綱領は、『経済回復のために財政の緩み』と『大きな財産に到達する諸措置によって資源の設立(七万五、〇〇〇フラン以上の所得について課税の比率の増額の急速な前進——相続の課税の再組織——事実上の独占利潤の課税・・・)』の間に、妥協を反映する。(第五の付属文書参照。)それは、最も遅くそして最も不完全に投票されたようになる、なお制限されたこれらの措置であるだけ一層、一九三六年一月に綱領の署名及び四月—五月の選挙の勝利を越えて、財政問題について不一致が固執する。その上に、——『財政の刷新』と標題を付けた——綱領の『経済的諸要求』という章の第三の部門は、共産党の代表者たちの要求に含まれた数多くの措置、『外国に隠された財産の没収あるいはフランスに価値に反対する財産の没収まで進行する』、特に『財政の同一性イケンテイキのカードを実施すること』そして『資本輸出の監査をして最も厳しい諸措置によって資本輸出の逃避の鎮圧』を含む。それは、はつきりと、為替手形の監査の可能性を示した。さて、人々は、彼らの以前の立場の決定を読み方にとって、急進黨員たちと社会黨員たちでさえ現実を使用することを考えたかどうか、お互いに尋ねることができる。急進黨の敵意ははつきりしている。すなわち、フランス社会党に関して、もしもフランス社会党は先験的にその原則を拒否しないならば、数多くの社会党の責任者たちは、通貨の国際的安定で期待された、そして恐慌から出て行くため有益なものとして判断された、『通貨の和解』に反対のように、原則を提出した。歴史の結果を援用さえしないで、綱領の署名の現代の確認でもってその対決は、注目された財政諸措置に同盟の二つのパートナーの結集は、十分に脆弱なように見えることができることを証明する。(『国際関係』、一九七八年、一三号、一一一—一一五頁の中にJ・ブーヴィエ及び『現代』、一九八三年四月、四四一—四四二号、繰り返し、三五一—三七一頁の中にM・マルゲラーズ参照。)

第五のテーマは、平価切下げについて不一致である。一九三五年三月にベルガの平価切下げ後一層明白になった、フラ

ンの過大評価は、一九三五年一月に猛威を振う、投機にフランをもっと傷つき易いとなる。増大する数で投票は、——ますます少なく孤立した、P.レイノー P. Raynaud の側で——フランの平価切下げの可能性を想い起こす。フランス社会党と労働総同盟は、通貨の問題について、曖昧な態度を防衛する。公式に、二つの組織は、平価切下げが、サラリーマンたち、特に労働者階級の購買力のため、その筋が通っている価格の騰貴を横切つて、導くことができるであろう、不幸な結果のために平価切下げを拒否する。しかし非公式に、社会党及び労働総同盟の指導者たちは、平価切下げを避けることは困難であろうということを理解させる。そしてとりわけ、社会党の指導者たちと労働総同盟の指導者たちは、大きな貨幣の大部分の平価切下げの事実から、——一九三一年以降ポンド、一九三四年以降ドル——、『新しい為替相場の制定』、すなわちフランの平価切下げを意味する、国際連盟経済委員会によって発せられた、『国際的な通貨の安定』の考えを防衛する。「プランのための仕事場」紙と「ル・ポピュール」紙は、とりわけデフレーションに攻撃する。「リュマニテ」紙は、まったく同様に、サラリーマンたちによって恐慌の責任を耐えさせる手段として、平価切下げを告発するのにも。共産党のキャンペーンは、公式の政策は、『デフレーションではない、平価切下げではない』、フランス社会党の陣営の中で確実な影響を行使する。急進党員たちは、同様に貯蓄の削除を恐れて、平価切下げに反対のようである。しかし、農民たちの困難によって影響を受けて、急進党員たちの間の若干の人々が、ついに一九三五年末に、平価切下げのある不可避性の考えに及ぶ。G.ルフランは、V.バッシュュ及びE.カーン E. Kahn (人権同盟)、ヴァルテル Walter (反ファシズム知識人監視委員会)、Y.デルボス (急進党) としてとりわけプラン (労働総同盟) 及びV.オーリオール (フランス社会党) を含む、制限された及び秘密の集会は、——『集会のため、平価切下げはすべてのことを条件づけた』——、招かれなかつた共産党員たちに訴えないで、平価切下げの原則で決定することを暴露した。(G.ルフラン、前掲書、九四頁、参照。) そのように、総会で『危くそれについて破りし損なつた、共産党の代表者たちの激しい、還元できない対立』の結果として、平価切下げは、人民戦線綱領と別かれています。すなわち、しかし、平価切下げは、一九三六年六月の前でさえ、国政選挙

後通貨政策を導くように仕向けられて行くであろう、共産党の代表者たちに必要なように見える。そして、九月まで、人々は、この問題についてフランス社会党の責任者たちの中で、二つの面で言葉と政策を発見しよう。さて、共産党員たちにとつて、平価切下げは、単なる通貨技術の問題ではなかった、平価切下げは、同じく社会政治的な戦略の要素であった。すなわち、この観点から、平価切下げは、広範な反ファシズム戦線の創設を妨げた。『デフレーションか平価切下げか』というジレンマは、人民を分裂させ、サラリーマンたち(…)に反対する預金者を立てさせるように、寡頭政治に対して、許可した。『金持ちたちを支払わせること』は、団結の決まり文句である。(Gポリツェル)。(ポリシェヴィスム誌)、一九三五年一月)。

第六のテーマは、綱領の二つの『読み方』である。そのように、内容の公表の日付である一九三六年一月以降、人民戦線綱領の内容は、まったく妥協として、曖昧なように見える。すなわち、二つの『読み方』は、署名者たちの間にその内容を作り上げた。一、共産党について。すなわち、本質的な目標は、そのように結び付けた、恐慌の犠牲者たちの広範な大衆の社会的諸要求を満足させることである。すなわち、諸手段は、綱領の財政上の、特に税収の諸措置について支えられることにある。二、フランス社会党について。すなわち、(農業事務局、フランス銀行の改良及び軍需産業を除いて)要求された『構造的諸改良』がないために、アクセントが『購買力の一般的な能力の値上げ』の上に置かれる。すなわち、しかし財政上の部門は、少しも強調されない。その理由は、その部門は、税収の緩みの懸念に、一時的な予算の赤字に関してある無関心に及び大商業国家、すなわち連合王国と合衆国とともに通貨の及び商業の宥和の意思に衝突する。大事業の融資は、『蓄財した地方の貯蓄』へのアピールによつて保証されるはずである。急進党員たちに関して、急進党員たちの立場の決定は、——諸改良の拡大を制限するため——消極的であったか、それとも対峙した他の部分に対して指定かだった。人々は、しばしば同じ感度から生じた証言の後に、国有化を拒否するため共産党員たちと急進党員たちの出合いを強調する。しかし、他の問題の大部分について、そして特に税収のそして通貨の問題について、これらの最後の証言は、

たとえ証言は公の財政の不均衡によって、多くずつと不安であることを示すことは真実であるとしても、フランス社会党と労働総同盟の側から傾いた。(特に、A^リデルマとR^リツランの回想録、参照)。共産党員たちは、従って、書類について、綱領の広く要求の性格について満足を得たように見える。G^リポリツェルは、その性格を満足する。すなわち、『それは、連合の綱領は、綱領は全会一致を集め得た、諸要求の一覧表であるという理由がある(････)、諸要求は結合するし、諸理論は分裂する。』(『ボ^リ、シ^エ、ウ^イ、ス^ム誌』、一九三六年二月一日)。J^リデュクロは、等しくコミンテルンの幹部会の前に相対的な勝利としてこの結果を提出する。(C^リ、H^リ、I^リ、M^リ、T^リ、一九七五年、一一一―一三号、三〇三頁)。しかし、綱領の適用の問題は、完全なものであろう。すなわち、そして、他方で、共産党員たちは、人民戦線組織について、急進党員たちと社会党員たちの結び合わされた敵意に衝突する。すなわち、共産党の提案に反対して、下部の委員会への個人的な加盟がないであろう。さて、共産党の戦略の中に、綱領の要求する内容は、署名者の諸政党を除いてさえ、すべての者に開かれている、人民戦線諸委員会の創設でもって計画された。この同じの演説において、J^リデュクロは、次のように証明をする。すなわち、『人民戦線、それは、諸組織間の単に協調ではない、それは、下部での大衆の連合である。すなわち、それは、基本的な点、すべてのわれわれの政策的な決定の問題である(････)。他の点では、われわれの同盟国は(････)、広範な基盤で設立されたこれらの人民戦線委員会は、われわれの革命的な政策の要素になるもしくははなるであろう(････)ことを知っている。それは、人々が人民戦線の中で出会う主な抵抗の理由であり、それは、これらの委員会の設立である。』(同上、三〇九頁)。綱領の署名の数日後に開かれ、人民戦線の戦略を確認する、ヴィユールバンヌ(中仏リヨンに近いローヌ河沿いの町)大会において、M^リトレーズは、次のように強調する。すなわち、『人民戦線は、今後、労働者たちと農民たち、官吏たちと知識人たちの莫大な大衆を集める。しかし、人民戦線の組織は、非常に弱い。しばしば、人民戦線に加盟する色々な集団の指導者たちを集める諸委員会が単に存在する(････)。実は、各村でそして各工場で、労働と自由と平和の人民戦線は、堅固に組織されねばならない。』(M^リトレーズ、著作、三巻、一分冊、一〇六頁)。この下部委員会の問題

は、選挙の勝利後でさえ、特に綱領の有効的な適用を保証するため、主要な共産党の心配事の一つになる。綱領の作成の時提出された問題は、実際に新しい活力で、国政選挙及びブルム政府の設立後現われる。^(四)

第三のテーゼは、綱領の適用（一九三六年六月—一九三七年初め）である。

第一のテーマは、綱領の実現における不平等である。綱領の一部分の実行の急速さは、広く、スト及びとりわけ企業の占拠の拡張と、投票においてかなり制限された——、たとえ共和派の規律は議席において選挙の勝利を非常にはつきりとするさえ、同時に選挙の豊かさを結果として生じない。色々な諸改良の間、それは、満足は最も速く適用された占拠の目的、すなわち、四〇時間制、団体契約制、有給休暇制を導き得る諸改良である。法案は準備され、閣議で提出され、議会特別委員会に従い、そして二二日以下の二つの会議によって採択された。周知の事実、これら三つの措置の二つは、綱領において存在していない。すなわち、そして、第三の措置、四〇時間制は、数字をはつきりさせないで、『一週間の仕事の削減』だけ言葉の下に現われた。事実、それは、スト及び六月七日のマティニオン協定の交渉によって、結果によって、一九三六年春の労働者の勝利の象徴になった問題を、こうして『付け加わつ』た、労働及び労働組合運動である。なお、これらの採択された法の有効的な適用を保証する必要があった。二カ月の間に、人民戦線の経済的及び社会的綱領の条項の大部分は、二つの会議によって採択された。もしも人々は、調停について法と仲裁と財政的改良の法を除外するならば、人民戦線の改良の事業は、実際に八月一日以前に完成された。人々は、二つの証明に処置することができる。すなわち、一、社会的及び経済的諸改良の大部分は、老人たちの年金、失業の国家的資金、商業資金手形の改訂を忘れない除外して、有効に実現された。二、逆に、『貯蓄の掠奪に反対する』及び『信用の最善の組織のため』章の全部は、フランス銀行の改良を除外して、さらに綱領の言葉と違った言葉の中に実現されなかった。同じく、『財政の健全化』という見出しの数多くの重要な論文、特に財政の同一性の地図及び為替の検査は、適用されなかった。これらの証明は、二つのシリーズの考察に導く。先ず第一に、人民戦線の改良する時期は、『熱い』時期と完全に合致する。時期の間に、サ

ラリーマンたちの不平等な数は、フランスにおいて新機軸の闘争の形態でもってストをした。他方では、諸改良の実現のため観察されたずれば、一九三六年にそしてそれ以上に、しかし経済的な及び社会的な目標を保証するため、財政上の諸改良に支える必要性を強調するように止めない、共産党員たちの読み方を犠牲にして、綱領の社会党の『読み方』を反映する。共同綱領への忠誠、しかしなおざりにされた綱領の若干の項目についての強調、そのようなことは、共産党はイヴリーに開かれた、五月二五日の中央委員会から利用しようとして試みる、繊細な戦略である。政府とともに単なる真の直接な接触は、初めから週一回として、MittレーズとJ・デュクロと彼の自宅でL・ブルムとともに考えられた、会話である。諸事実の中で、この会話は、ますます夏の末に間が空くようになる。すなわち、そこでMittレーズは、公にそれを言わないで、この会話はますます失望していることを、一〇月一七日の中央委員会で打ち明ける。(IRM文書、七八四、一一五頁。)

第二のテーマは、綱領への誠実と綱領の強制である。五月末に、将来の総理大臣との彼らの最初の出会いの時、二人の共産党の指導者たちは、人民戦線綱領を適用する必要性について主張する。諸文書の中の現在の速記録によれば、Mittレーズは、五月二五日、中央委員会に打ち明ける。すなわち、『われわれは、大事業の計画を融資するため、金持ちたちを支払わせるという、提案をしつかりと言い表わした。この提案、それは、われわれの提案である。提案は、少なくともわれわれが提案を暗示した形態の中で、他の諸政党によって承認されない(……)、人々は、人々が地方の貯蓄に訴えるであろうということを、われわれに言う。それは、人民連合綱領の中である(……)。われわれは、この点について言う、そしてわれわれは、すでにブルムにこの点を言った(……)。すなわち、あなたの綱領の他の諸点に対するようにそれを、われわれは主張するであろうし、われわれは支えるであろう。だが、われわれはとりわけ希望する問題、——それは、われわれが綱領を語ったこの方向の中である——、(……)それは、直ちに大事業の開始であったということである。』(IRM文書、七八一、三五頁。)そのように、共産党は、ブルム政府と政府の綱領の考え方を主張するように約束し、同時に、

政府の固有な読み方を防衛し続ける。しかし、中央委員会に内部の演説のこの章節の中で、章節は諸文書の中に現われるように（この章節は、印刷された翻訳の中で廢止された）、綱領との関係によって値の競り上げの意思がない。すなわち、『共産黨員たちの任務は、現実の力のデモのように、ここに居る問題を非常にまじめに分析し、判断することであり、獲得するためこれらの現実の条件の中で、大衆はすでに主張することができる問題を闘争することである。それは、人民連合綱領に対するこの愛着の方向であり、それは、大衆によって理解された、そしてわれわれは大衆を動員することができるであろう、最も直接的な最初の諸要求に対するこの愛着の方向である。』（同上、四六頁）共産党は、人民戦線委員会の組織を当てにし、綱領の党の『読み方』を考察させるように試みるため、再統一された労働総同盟を当てにする。しかし、共産党の不参加は、平価切下げのように、重要な政府の決定について党の分離を容易にする。人々は、ずっと最近の仕事によって同様に一九六五年の討論会から、一九三六年六月以降、L「ブルムは、イギリスにおける財政官、E「モニック」によって、ロンドンとワシントンで一致した平価切下げの偶発的な関心で納得された。（『国際関係』、一九七八年、一三三号、の中に、R「ジロー」の論文、及び『レオン「ブルム誌」』一號、一九七七年、参照。）モニックは、二つの強国を探るため秘密に送られた。決定は、状況はロンドンでまだ成熟していない、ブルムとオーリオールが、特に七月の借金のお陰で、平価切下げに頼らないで、財務局の危機を解決しようと考え、事実からして当然九月まで遅らせた。しかし、秋に、すでに六月に激しく、資本輸出は、特にナチスの脅威の返事として、一四〇億フランの全体の価値である軍備綱領の開始の報告によれば、加速される。（R「フランカンシュタン」『フランス、再軍備の価格』（一九三五—一九三九年）パリ、一九八二年、参照。）平価切下げは、アングロ「サクソン」の強国とともに三国の宣言から調和された、一九三六年九月二五日、実効のあるものである。共産党は、五月に決定された党の態度によって、綱領の欠けた、平価切下げを批判し、だが政府を弱めないように、投票を批判する。この時から——一九三七年二月に公式に告げられた休止の前でさえ——、政府の改良の熱意は、動揺する。その年の末に最終的に採択された財政的改良は、とりわけ緩みの諸措置によってマークされ、共産黨員たちを満足させ得ない。

大民間事業の綱領は、次第に細り行く生命（財産）（ポードウッドウシヤグラン、バルザック作『あら皮』一八三一年より）として自分の生活を切り詰め、P. S. S. の労作がそれを証明したように、失業に関する有効な影響を行使し得ない。経営者と右翼の反撃に直面して、共産党は綱領の完全な適用を要求する。すなわち、『われわれは、通貨の平価切下げを経済的レベルについて許容しなかった、しかし金持ちたちを支払わせる傾向がある諸措置を予測した、人民戦線綱領の完全な適用を要求するため、われわれの宣伝の自由を用いることを続けるであろう。』（M. トレーズ、『リ、ユ、マ、ニ、テ』紙、一九三六年一〇月二五日）一九三七年六月に、ブルム政府の終りまで、共産党は、党が人民戦線の団結の保証を見る、綱領の全部の適用に忠実なものである。一〇月一七日の中央委員会以降、トレーズは、六月に経過した問題と違って、ストに直面した『中産階級の動揺』は、労働者階級との断絶を導くことを不満に思う。すなわち、共産党は、その後、小ブルジョワジーにとって、危険はもはやファシズムではなくて、労働運動であるということを確認する。共産党は、『人民戦線は、中産階級に非常に少し与えた』ということをつけ加える。（IRM文書、七八三、一二頁）余裕は、従って非常に狭くなる。すなわち、共産党にとって、特に経営者の挑発の対象であり得るストの中に、『熱烈』綱領の党の『読み方』を広めるように試みることはもはや問題ではあり得ない。夏の社会的な諸法から由来する再会にもかかわらず、そして第二の六カ月にある回復にもかかわらず、投資は再び出発しないで、財政情況は悪化する。G. ボリス G. Bors は、一九三七年の初めにそれを注目するように、すなわち、『回復に由来するリフレーションと資本蓄積反対は、フランを創造し、あるいはフランを明らかにするにつれて、資本の逃避はフランを消去する。』（一九三七年二月二〇日、『ラールミ、エール』（光）紙）綱領の社会党の『読み方』への政府の忠実さは、三国協定は為替の検査に頼らないで約束として考えられただけ一層、政府を財政自由主義から出て行かないようにさせる。そのために、再軍備と同時に進行することを不可能な、経済的諸改良の追求—大事業—そして社会的（諸改良）—年金—、そして『自由な』財政政策は、上院、ロンドン、右翼、経営者及び（J. ルエフ J. Rueff のような）しかし大事に使ったある高官たちの結合された圧力の下で、政府を、瓦

解の前に最後の段階、すなわち『休止』の道に約束させる。逆説的に、共産党にとって、党の政府への不在は、中産諸階級を不安にするため利用された。この防衛的な局面の中で、『綱領への復帰』の共産党のスローガンは、同時に、一九三六年の経験の強化及びそれまで忘れた諸措置の採択によって経験の拡張を包含した。しかし、道は狭かった。すなわち、どのように『寒い』時期に共産党の読み方を勝利させるか。^(五)

一九三六年の選挙の勝利の前夜、経済及び財政に関して、人民戦線綱領について共産党の態度の検討は、時期の数多くの目的を測定するようにできるし、運動する共産党の戦略をよりよく把握するようにできる。^(六)

二

第二の論文は、ダニエルタルタコフスキー (I R M 編集委員) Danielle Tartakowsky によって提出した、そして注釈した、モリス・ストレーズの未刊原稿『六月のストから休止まで、矛盾の中心で『大衆内閣』(新政府について共産党員たちの態度を明確にするため、『リュ、ユ、マ、ニ、テ』紙におけるポール・ヴァイヤン・クテュリエによって、一九三六年五月六日、使用された決まり文句によれば)』である。Mストレーズの未刊原稿は、五〇年振りで公表された。

『政府は、われわれが政府を理解する意味で、人民戦線政府ではないだろう(…)。しかし、それは、全国に現実としてわれわれの決定的な重要さの割合自体で、われわれの責任の割合自体で、そして現在について及び未来についてこの経験のあらゆる犠牲を払って成功を関係する、決議によって予測された意味で、また単なる左翼政府では同様にないだろう。それは、他の諸国におけるように、社会民主主義の協調の連立政府ではないだろう。すなわち、たとえ社会党員たちとともに急進党員たち、政府の中に社会党連合の会員たちがあっても、それは、チエコスロヴァキア政府のような、人々がドイツにおいて知った政府として、あるいはオーストリアにおいて知った政府のような政府ではないであろう。それは、人々がかつてベルギーにおいて知った政府として、あるいは同時にイギリスにおいて労働党政府として政府ではないであろう。政府は、わが国における大衆の圧力の結果であるという理由で、この政府はいつか来るであろう。政

府は大衆、それ自身によつて押し付けられる、そして政府は共産党の努力のお陰で生まれかつ生きるであらう。それは、未刊の状況である（われわれによつて強調された）。すなわち、人々は、どんな共産党の歴史の中で決してそれを見なかった。（IRM—七八一。われわれはここで発表する速記録は、モリス・ストレーズの著作、三巻、一二分冊、一九頁及び以下における発表されたこの同じ演説の解釈と少し違う。）¹

国民議會議員選挙の第二回投票の二〇日後、一九三六年五月二十五日に集まった、中央委員会の前でモリス・ストレーズによつて述べられたこの短かい報告の抜刷文は、すべての他の諸問題の間に、生まれるべき政府そして今年政治的経験の獨創性、すなわち大衆の活動的な支持を設立する問題について強調する。一九三四年二月九日及び一二日のデモ、次いで一九三五年七月一日のデモそして今年の七月—八月の緊急政令に反対する動員は支持を証明する支持は、事実上、抵抗を打ち負かすため（一九三五年二月一日、一六日の中央委員会の前に「プロワッラシヨンの報告、C、H、I、R、M、二〇号、一九八五年参照）、そして行動統一協定の後、一九三六年一月に人民連合綱領の批准、次いで三月に労働組合の再統一を許すため、人民戦線の実現の各段階において決定的に現われた。（D「タルタコフスキー『街頭の戦略』、『社会運動誌』、一三五号、一九八六年四月、参照）。『ある時期の間、モリス・ストレーズは、一九三六年四月の中央委員会の時、こう宣言した。われわれは、フランスにおいて、経済闘争は労働者階級の政治的活動のレヴェルではなかったということを証明することができた。（二月一日の「プロワッラシヨンの報告、前掲書。この評価は、ヴェイユール・バンヌ大会の時表明される。最後の時期に、この領域に、帰着することができた色々な諸要求、そして特に、ストの発展、数多くの勝利のスト・・・、すなわち、ずっと多数の行動があるということ承認する必要がある。この領域は、なおもっと大きなストを準備する。（IRM—七七九。一九三六年四月一日の中央委員会、結論の演説。）もしも、人々は、国民議會議員選挙に先行する数週間の間、街頭のデモの後退を記録するならば（この後退は、まったく同時に、ラヴァール内閣の瓦解、国政選挙の近さ、及びこの支払い期日の直前に、プレスト及びトゥーロンにおいて一九三五年八月に生じた挑発の型の新しい挑発を避けるように意思に因る。一九三六年四月一日、二日の中

央委員会の時、人々は、しかし、ドゥラロックが示す、活動の回復に直面して、大衆のある受動性を残念に思う。(IRM―七七九。)、人々は、事実上にストの軽い圧力に参加する(人々は、四月に三六スト及び五月に六五ストを数える。)、そして、五月一日は、すべて特に冶金産業の中で、普通よりもっと重要なスト突入によってマークされる。(E「エナッフは、しかし、五月二五日の中央委員会の時、人々は五月一日大衆の大デモのバリ地方の中に組織することはできなかった」ということを嘆く。(IRM―七八一。))選挙の勝利によって創られた新しい状況は、共産党に従って、大衆の干渉が強調されることを許し、特に必要とする。

第一のテーマが、大衆の行動的な支持に対して、である。モリスストレーズは、共産党員たちが政府に参加しないであろうという理由を想起し(S「ヴォリコフ『フランス共産党と党の人民戦線政府への参加の問題』、C、H、I、M、T、三四号、一九八〇年、参照。)、そして共産党の支持の性格を定義した後、大衆の行動から出る政府とともに、大衆が維持しなければならぬ諸関係を明確にする。

『社会党員たちは急進党諸政府に不満であった時、社会党員たちは反対の投票用紙を入れたし、最も完全な及び最も絶対的な無責任で結果の最少の心配がない、政府を転覆した。われわれは、巧く行かないだろう時、それを作らないであろう。われわれは、全国にわれわれの七二名の議員たちと他の活動家たちを始動させるであろうし、われわれはそれで十分でない理由を国に説明するであろう(拍手)。そして、われわれが言う、われわれが私があえて言うならば漁師の死を望まない理由で、われわれは白票を入れなかった。われわれは、巧く行くであろうことを望む。われわれの投票は何も決定しないであろう。しかし、国中に大衆の圧力、それは計算するであろう。そして、それは、さらに人々が大デモに関係しない理由である。(この「人々」は、人民連合の他の構成要素を指示する。)人々は、五月一〇日から六月七日までデモを後退させたし、次いで七日から一四日までそして多分、人々は、なおデモを後退させようとして望んでいるだろう。われわれは、それは終った、それはすでに六月一四日にかなり待ったことであると云わなければならない。(共産党は、全国人民連合委員会で、国政選挙に続いて起こる日曜日、勝利の大デモを組織するように提案した。『あなたは、次の政府に言うこの意思の表明であったであろう、問題を報告する。すなわち、われわれは在宅している。あなたは、もしも金融寡頭制及び二百家族の抵抗があるならば、われわれに当てにすることをできる。』と、フロリモン「ポントは解説する(五月二五日の中央委員会、IRM―

七八一)。社会党と急進党は、先ずデモを拒否し、次いで提案に結集する。全国人民連合委員会は、当時、五月一日、六月七日このデモを組織するように決定し、次いで五月二四日、一日にデモを拒否する。委員会は、パリに、コンコルド広場及びシャンゼリゼ大通りでデモ、そしてアンヴァリッド前の広場についてマンモス集会を組織するように予定された。ストによって創り出された状況及びマティニオン協定の署名は、しかし、最初に予定された綱領を変更するに至らせる。もしもあるデモに対する堂々としたデモは、フランスの大部分の都市の中に一日よく起こるならば、パリのデモは、デモに関して、全国委員会によって取り消される。この決定に反対している、共産党中央委員会が、当時ユェフアロに広範な連合を組織するように決定し、そして、連合の統一を保持するように心配する、社会党を演説者を連合に送るよう求める。中央委員会は、問題を作る。委員会の中で、同志たちとのこの主題について話す必要がある。そして、われわれの党の政策を考慮に入れる必要がある。われわれは、何も代表しない人々によってわれわれを操縦させる義務がない。人々は、昨日政策を確かに見た。(すなわち、連盟兵の壁の伝統的なデモの時、組織者たちの言うところによれば、六〇万の参加者たちは集まる。共産党の提案によれば、デモをパリに対する勝利のお祭りに変えるため、このデモに参加するように急進党員たちの拒否にもかかわらず、共産党の提案は、事実上、デモの代わりをする。人々は、五月一日の日あるいはモスクワで一月のお祭りに自分たちがいるように思うだろう」と、フロリモン・ポントは解説する(IRM—七八一)。それは、大衆であるわれわれである(拍手)。それは、大衆の支持のこの問題の中で、決定的な要素がある義務であるわれわれである。われわれは、それは真実でない、われわれは人民戦線を望んだということを、国民連合政策とソヴィエトの間、直接の選択はなかったということを証明するため言った。われわれは、一九三四年一〇月九日人民戦線を言った。われわれは、フランスの人民の将来を決定的に保証するため、ついにソヴィエトに至る必要があるであろう、すべてを納得させながら、人々が現在の時に、すべての要素はソヴィエトの必要性がなお納得させない、人民の必要と意思に合致した政策を作り得たということを言った。われわれは多くの抵抗を克服した現在、共産主義でない、プロレタリア革命でない、人民戦線政策を適用する必要がある。共産主義の小児病の幾つかの頁を再読することは良い。レーニンは、『革命家である、そのことは幾つかの言葉、幾つかの決まり文句を意味しないで、一定の時に、常に大衆の運動を高めるようにどのように行動するかを知る』と言う。第二に、われわれは、本質的なこと、それは幾つかの共産党の閣僚でなかった。それは大衆の行動と組織であった、そしてそれはすでにわれわれの経験であることを返答した。われわれが、それはわれわれの闘争である、それは統一戦線を帰着させるようにできた、人民戦線を帰着させるようにできた、大衆の行動であるということを非常によく知っている。政府の綱領にとって、まったく同様であるだろう。(IRM—七八一)。ここで引用された通り道は、前掲書、著作の中に公表されたこの演説の述べ方において再生されなかった。』

選挙の勝利に必要であった、そして人民戦線の経験を定義する、大衆の干渉は、共産党によれば、その成功を保証するため必要不可欠である。

第二のテーマは、中継である。この大衆の干渉は、労働組合組織の通路によって優先権をもって長く発展した。共産党はその勝利として挨拶する、労働組合再統一は、この点に関して、新しいそして矛盾する状況を創り出す。労働組合再統一は、闘争の発展により有利な力関係を許可し、しかし党の『伝導ベルト』としてずっと長く労働組合を考えるように禁止する。

『ますます党の労働組合の仕事は、義務として成長しなければならないし、私は、労働組合を通して、義務として強調し、一九三六年四月に、労働総同盟に優先するその後力関係に関して、他方では慎重なアラシヤール Atrachari を想い起こす。』(私は、エナツフの楽天主義を分割しない、と、エナツフが付け加える。もしも実際労働組合を通して及び労働組合統一の実現を通して、党の影響力の前進であるならば、人々は、共産党員たちの役割、共産党員たちの重さは、それはわれわれの有利さのものであるような統一された労働総同盟の中にあることを言うことをできない。私は、トゥールーズ大会から、われわれは、われわれが手に入れることができた問題の最大限をそこで手に入れた、そしてわれわれは、われわれがトゥールーズで手に入れた問題からはずっと手に入れることに近日中にわれわれを準備するため、条件でもってトゥールーズ大会から外へ出た、意見を保持した。しかし、われわれはトゥールーズで作った問題と人々は毎日労働組合の中に作る問題の間、並外れた違いがあることを、私は同時に知っている。IRM一七七九、四月一日と二日) われわれは統一労働総同盟を持っていた時、党に、党の中央委員会に、政治局自体に、経済闘争の問題について、労働組合あるいは労働組合の指導者たちを診断しなかったため、話すことを可能であった。今日、それは、もはや同一ではない。今日、人々がよく知る理由のある数のため、党はある保留を守らねばならないし、もしも人々が、統一労働組合は経済闘争の発展によって、ある方向で行動することを欲するならば、それは、行動する共産党のメンバーである必要がある。(同上)『五月二五日の中央委員会の時これらの同じ問題について干渉する、ウージェヌ・エナツフ Eugène Henaff は、メンバーの活動は、今日でも、色々なレヴェルに『評価すべき結果』を獲得するようにはできたと考える。(トゥールーズ大会は、特に、ブルム政府への参加の提案にジュオーは結局対立させた拒否、そして「人民」紙の中に労働総同盟の態度の変化を同盟の中に、共産党員たちの行動の信用に得させる。) すなわち、『私は、人々が人民戦線政府を持つことから今では考えだから、労働組合運動の中に、もはや政府を作成する必要がない、待つ必要が

ある、諸要求はわれわれを与えられたであろう、この考えはますます消えることを信じるし、人々は諸要求闘争の発展のためおキヤンペーンを強化することはいいことであろう、と彼は宣言する。労働組合の行動。諸要求闘争の発展のため労働組合での行動、そんなことは、私の意見で、もしもわれわれは議会の幻想を倒させる、そして労働組合運動の中にわれわれの影響を強調することを願うならば、党の全メンバーにとって、最も重要なわれわれの任務の一つである義務がある。(IRM—七八一、一九三六年五月二五日の中央委員会。)¹

共産党は、しかし、この伝統的なそして戦略的な支点は、動員に関して時間のすべての要求に返答することはできないであろうと考える。同時にそして国民連合のメンバー、イクオール、組織の確認された対立にもかかわらず(中央委員会、これらの組織によって、人民連合は、個人的な加盟で受け取ることはできないだろうということを決定された。五月の中央委員会で彼の干渉の中に、エロルデイ(リヨン地方)は、労働総同盟のミリタンたちに、工場あるいは地区における人民戦線委員会を構成する必要性を理解させるため、彼の地方の中で出合った困難を考慮する。すなわち、『われわれは、われわれに反対して、社会党員たちではなくて、労働総同盟の人々を発見する……。一人の同志は一カ月彼の反ファシズムの闘争のため服役した理由で、解雇されたわれわれの同志たちの一人の同志の再統合の基礎について、エリオ病院のわれわれの同志たちは、人民戦線下部委員会を構成するように試みた。われわれの同志たちは、ポスターによって、この施設の労働者たちを集会するように招待された。そして、下部委員会は構成された。しかし、次の集会で、労働総同盟の代表は、かかる形態に反対して立ち上がった。代表は、労働組合であった場所に、委員会を構成することは可能ではなかったことを宣言した。同志たちは、工場細胞に反対していた。同志たちは、下部委員会に反対である。同志たちは、われわれの党は、企業的基础について強化することを避けるように願う。』(IRM—七八一)、共産党は、委員会の発展を推進し続ける。委員会の発展を、モリス・ストレーズは、委員会はソヴィエトでなく、革命的クラブでないが、『大衆の現実的な意思を表わし、ソヴィエト権力の味方である共産党員たちによってばかりでなく、急進党員たち、社会党員たち、共和党員たちその他によって、大衆の現実的な条件の中で、協調と監視を保証できる』ことを想起する。(IRM—七

八一、五月二五日の中央委員会。』私は、フロリモン・ボント Flomond Bonte が追求する、選挙された委員会に反対して国民連合に参加する組織の多数派の中に議論があるし、しかし、各町、各地区、各村に防衛人民委員会を作る可能性がない、学校、衛生、そして小商人たち、子供たち、小児用寝台、差し当たり少しはやっているすべての一連の問題の諸要求を仕事をする可能性がないということをし、よく知っている。(同上。』) もしも、人々が、この日に、地方レヴェルで行動をよく取り巻くことは本質的になるであろう、これらの委員会の実現について余り少ない問題を知っているならば(委員会の多様な性格及び委員会の行動について、ディディエルメール『ロワール・エシエル県におけるアムステルダム・ブレイエル運動』、C、H、I、R、M、一八号、一九八四年、参照。)、人々は、その代わり、労働組合運動に対象となった努力は直接の果実を生産し、その果実は、五月二五日、中央委員会のメンバーが養うことができた、最も夢中になった希望を何の疑いもなく越えるということを知っている。

第三のテーマは、ストである。少なくともひどい目に会わなかった、ストの秘密のオーケストラ指揮者でなかった、共産党員たちは、でもやはり、ストの中に、ストの戦略とストの戦術の結果を認めた。(『これらのスト及びストは労働者たちによって、われわれは少しの力を持つ場所ですら、全フランスにおけるストの組織、指導のため適用された方法を指導された、条件は、われわれの統一労働総同盟によって一五年間発展された方法の土台について指導された、と、E「エナッフは宣言する。それは、そこでわれわれの戦術の影響力である。すなわち、大衆によってスト委員会の選挙、大衆の信用を持つ及びそのように享有する指導」、I、R、M一七八二、一九三六年六月一三日の中央委員会。同様に、G「モンムソール、フランス労働運動の歴史的段階」、『ポリシエ、ヴィスム誌』、一九三六年六月一五日、参照。運動の現実にはこれらのテーゼを対抗させるため。B「バディー、ルノー工場における人民戦線のスト」、『社会運動誌』、八一号、一九七二年、及びレイモン・アンズヴォルト、『一九三六年五月と六月のスト。ノール県及びパドゥ・ウカレ県の炭田におけるこれらのストの研究に建てた新しい分析』、『社会運動誌』、九六号、一九七六年、参照。) ストは、パリ地方の共産党員たちの情報会議で提出された、報告の中で分析される。報告の中で、モーリス・ストレーズは、彼の有名なスピーチ、すな

わち『ストを終わらせる』と発し(このテキストは、六月三日の『リ、ユ、マ、ニ、テ、紙』の中で再現される。そっくり全部、まったくしばしば、一部分を切り取った文章を引用しよう。すなわち、『もしも今目的は、その意識とその組織の中に大衆のレヴェルを徐々にまったく上げながら、諸要求のため満足を手に入れることであるならば、当時満足は手を入れられたすぐに終えることができる必要がある。』、次いで、フラシヨン、労働総同盟とパリ冶金労働者たちにフランス共産党の三つの挨拶に加工され、他方ではフェラの除名を宣言する(四月二日の中央委員会の時、党の路線、党によって日和見主義者で資格を備えた路線に反対して立ち上がった、そして五月二五日の中央委員会の時、繰り返し返した、フェラは、これらのストの中に革命的状況の酵母及びそれらの本来のテーゼの確認を見るように願う。)、すなわち、ストの大きさとストの方法によってこれらの注目すべきストは、重大な社会的な経験に帰着し、そして労働組合組織の前代未聞の増大に帰着した、一九三六年六月の中央委員会の時(同じテーマは、一九三六年七月一〇日の全国協議会の時、また始まった。報告は、宣伝人民委員会の出版部によって、フラン、ス、人民の奉仕で、という題名の下に出版されたし、著作、三巻、一二分冊、七四―一二一頁、の中に、再現する。)、ストは、同じく、理解させるそして若干の者たちは孤立を導くようにためらわない、労働者階級に孤立を避けることをできる党、イクオール、党の新しい権威の証拠を設立する。(『昨年の六月に労働者階級の大勝利は、単に経済諸要求及びその新しい法律的地位の入手、労使間の団体協約ばかりではない。それは、挑戦を避けるため、同じ時期に、必要な政治的方向を征服されたと同様に、その中産階級との接触を保證することであり、そこを通過して、G#モムムソオーによって、それらの書かれた征服を保證することである。』、『ポリ、シ、エ、ヴィ、スム、誌』。『人民戦線勝利から社会運動』、一九三七年一月一五日。)人民連合綱領に登録された諸措置の採択を急がせ、そして、労働者大衆にストの力を暴露しながら、人民戦線に(疑いもなく最も持続力がある)新しい影響力を与える、ストは、同じ運動の結果として、ファシズムに反対して結んだ相互古典主義の同盟に固有な制限を明らかにする。反ファシズムの闘争から諸優先権の優先権をあくまで作り続ける、共産党は、是非必要となるその教訓を引き出す。すなわち、『ピヴェールは『すべては可能である』と言った時、われわれは『すべては可能でない』ということを言った。そして、時折理解することができ「ジ、ユ、

ルナ、ルリデバ、(討論紙)は繰り返して、『すべてはまだ可能でない』ということを使う、と、モリス・ストレーズは宣言する。われわれは、労働者階級の余りにも加速された前進によって、われわれはわが国の農民たちと中産階級と切つたことを望まない。運動の全体は上昇するため、若干の特別な側面について監視する必要がある。労働者階級は、大胆さでできるし、一定の時に、二月九日のような決定の大精神でできる。しかし、経験は、もしもわれわれがそこに注意しないならば、労働者階級は、われわれを大衆の一部分から切る、運動を引き起こすことができるということを証明する……。それは、それはわれわれを暴険主義に進むように危険はないであろうから、われわれが保証しなければならぬ(……)。パンのため自ら連帯し感じる、労働者と農民大衆の精神状態である。(IRM—七八二、一九三六年六月一日。)] 共産党は、しかも当時、この動員は労働者階級に反対してそれらの友党を訓練しないということをもつたく避けながら、それらの困難を人民戦線に対して克服することをできるため、大衆を動員することをできる行動の新しい諸形態を定義することを試みる。(六月の中央委員会で彼の干渉の中で、レオン・モーヴェは、高価な生活に反対して、一四区の主婦たちによって繰り返された行動を考慮する。主婦たちは、あらゆる売上を妨げ、価格を上げた、小売店の前に居を定めた。午前中少しも売ることではできなかった、商人は、彼の客たちの信用を見付けるため、彼にじゃがいもの販売広告を作るように忠告する、そこからモーヴェと話し合うばかりである。) 共産党は、そのように、人々が先ず第一に他の問題を納得しようとする、そしてお祭りの強い局面は人民戦線の若干の印象を押し付け、あるいは対決する傾向がある、共産党が切願する、多数の統一連合の主導権である。全体的に矛盾に逃れないで、政府の政策は間もなく鋭くする。(七)

第四のテーマは、矛盾である。スペインにおけるファシスト攻撃としてフランスの右翼とフランスの経営者の反撃に對抗して、政府は足踏みし、次いで降伏する、人々がそのことを知っている。政府は、不干渉によって、次いでついに休止に至る前で平価切下げによって返答し、七月一四日に過ぎ去って、少なくとも大衆の動員の前にためらいを証言する。(王子公園で共産党によって組織された(二三六年一〇月四日)、そしてドゥラロックの激しい対抗デモを挑発する、連合の直後に、内

務大臣は、パリとパリ地方における新しい命令まで、『反対の行動及び反動を挑発する、そして公の精神で新しい動揺を印刷するように余地があるデモと連合』を禁じる。フランス共産党は、その時さえアルザス・ロレーヌにおける五〇以上の集会を予定したので、政府は、かかる数を越えて、安全を保証することはできるように確認しながら、これらのデモの数を一〇で制限する。セーヌ県の社会党連盟は、この方向の中で数を支持する。『ル・ポ、ユレ、ル紙』、一九三六年一月二三日、参照。それは、最後に数週間後で、サラングロの葬儀の日、パリで大衆の大デモを組織する傾向がある提案の主導権である、フランス共産党である。今回、全国人民連合委員会によってまた始めた提案である。〕不満は、明らかに（幾つも干渉は、ミリタンたちの『いらだち』、そして一〇月の中央委員会の時、セクト主義の実行の再出現を考慮する、IRM—七八三。）、闘争は、モーリス・ストレーズは一九三六年一月一六日—一七日の中央委員会の時に分析する、責任を負う。（人々は、再び、一〇月に九八四のストを数える。〕

『人民戦線が衝突する困難、人民戦線の発展に関係する客観的な性格の困難、共産党員たちに反対する降伏、攻撃の政策に関係する困難がどのようにあるか、人民戦線が作った問題を考えたので、この中央委員会の会議の中で、わが党の態度は、時折、大衆の中で渦と釣合った、わが党に反対して指導されたキャンペーンの多少とも成功と釣合った、わが党の敵によつて及び人民戦線の水雷艇によつて与えられた議論の多少とも成功と釣合った、かなり鋭敏だったことを確認する必要がある。よりよく見るため、二つの時期にこの状勢を取ろう。最高峰、熱狂、勝利、光栄であった七月一四日の直後に、それは、労働者ストで六月に始まった中産階級の不安、都市と農村の中の不安が発展するのである。労働者運動の発展は、小ブルジョワの構成員をびつくりさせた。ある日、パリの喫茶店の中で、『ストを終わらせることをできる必要がある』という宣言の直後に、われわれは多数の同志たちで居た、経営者はわれわれを認め、そして、経営者が、『さて、それは終わらないであろう、それは今もはや持続することはできない』とわれわれを言う。小ブルジョワたちは、ストの発展とともに不安であった。この問題をよく知っている、ブルジョワは興奮し、圧力を掛けた。さて、今、もはや右翼への危険がない、ファシストの危険は、小ブルジョワたちのため遠ざけることを除いて、事実上遠ざけたように見える、諸団体の解散、左翼への多数派、もつとファシストの危険があった、危険は、工場を国有化し、ソヴェト化し、占拠しようと欲する労働者たちの間で、左翼に現われる。内部の状況に関して、この不安を、人々がスペイン問題に関して同様不安を知った。政治局は、直ちに、ピュファロ演説の前からですら、まったくまだしかし少なくとも、スペインに関してわが党の政策を徹底的に支持した、最も

闘争的な彼の部分の中で労働者階級は居たことを確認し、そして中産諸階級はためらい、そして政府が防衛した態度に気になっていたということを確認した。多数の事実があった。方々でデモがあった。中央委員会にここでそれを言う必要がある。われわれがそれを感じたように、最も大きな工場の前衛、労働者たちのデモであった、美しい、激的な、闘争的であったレピュブリク広場のデモがあった。(このデモは、スペイン共和制を讃えて、一九三六年九月四日、人民連合委員会のアピールで組織される。『リ、ユ、マ、ニ、テ紙』と、『ル、ポ、ピュ、レ、ル紙』は、『三時間以上の分列行進』について話す。)その理由は、行列に若干のサラリーマンたちあるいは小ブルジョワたちの存在は、大きなパリの工場の闘争的な前衛で問題であった事実を何も弱点を突かない。立派なスト、一時間のストであった冶金労働者たちのストは、ある工場のため幾つかの困難を創り出した。少なくとも、そのストは、六月のストの間結合した、労働者たちと技術者たちの間、仲違いをする企てを容易にした。それは、技術者たちは、共産党員たちと社会党員たちを理解した後、労働を中断しないように決定したし、政府の政策に信用した、ルノー家の場合である。(『シシユヴェツェル』、『ピランクルのルノー工場の労働者たちとスペイン内戦』、『社会運動誌』、一〇三号、一九七八年。)それは、否定できない問題である。人々は、パリの金属のストについて、リヨン、マルセイユ、ある他の場所の連帯の証拠を持ったし、——それは、非常に重大である、記憶せよ——フランス労働者たちの全体のこの運動に干渉を持たなかった。あらゆる所に、われわれの知識に、この問題について他のストがあった。それは、労働者階級の中でさえ、少なくとも不安とためらいがあったということを証明する。中産階級は、とりわけ国内について同時に及び国外について不安であった。すなわち、ためらう、臆病な小ブルジョワの構成員は不確実の中に居たし、政府と社会党は、絶えず、——マルクス主義者たちとレーニン主義者たちのわれわれの見地から——大衆をわれわれに反対して立ち上がらせ、われわれを切り及びわれわれの共産党ばかりでなく、共産党の最も近いその大衆でもって共産党を孤立する意図でもって、大衆運動の発展の中で時代遅れのこの部門に支えられた。共産党は、あなたがそれを知っているように、国内レヴェルについて扇動の大キャンペーンとして指導したし、私はあなたに、パリ地方におけるデモの禁止に関してさえ、よく考えるように懇願する。大抗議はあったか、あるか。一般的に、われわれのアルザスロレーヌでの集会の禁止に反対する大抗議はあったか。否！なぜなら、ここで同様に、『要するに、これはよりよく冷静である！』と言う、小ブルジョワの精神状態が干渉する(……)。ヒトラーの危険に對してわれわれの態度に関して同様に、スペインに関して、すなわち、ここでブルムの返事がある、『われわれ、われわれはあらゆる犠牲を払って平和を願う！』(……)。そしてここで、人々は、補欠選挙はわれわれの政治局によってこれらの国政選挙の前、すでに与えられたこの分析を確認したということを行うことができる(……)。そして、今、それは、九月半ば頃、一つの方向に及び他の方向に影響を及ぼす各種の要素でもって、第二期は始まることである。一方では、ファシストの危険に反対する闘争に関する問題で同様に、経済問題に関して、経営者のサボタージュに反対して及び政府行動の不足に反対して、不満は、労働者階級の中で成長する。それには、人々は、あなたが認めるこの議事日程、人々が協定に忠実に自称する、そして年末に、人々が経営者の違反に反対して抗議を上げる、そして人々が政府に対して合法性を

尊重させるため、必要な措置を取る、そして週四〇時間制の適用と大事業の開始を促進するように要求する、事務局によって編集された及び九月一日に公表された、執行委員会の議事日程の中に、労働総同盟の指示を持っている。すなわち、ここで左翼への労働者階級の圧力がある。そして、それは、数日後、多分若干の小商人たちを除いて、少し皆を不満とさせる平価切下げとともに、反対の方向に、同じく労働者階級の中で干渉する、他の要素がある(････)。人々が、同様に、小ブルジョワジーの構成員に対して同様に全労働者階級に対して、他の要素、すなわち、一瞬うとうとしている大衆の眼に現われる、国内にファシストの危険を持っている。それは、共産党員たちはばかりでなく、抗議、議事日程、決議、対抗デモが始まるのである(････)。そして、同じく、スペイン及び平和の擁護に関して、方向転換が始まる(････)。(Mittlerは、特にEカーンと労働総同盟の態度の決定を引用する。)人々は、人民連合の内部に、人々がスペイン問題を再考するように要求する議事日程を持っている。そして、ここで、フランスにおけるこれらのデモは、国際的レヴェルについて大衆の圧力に照応する(････)。われわれが、この活動の場について勝った。ここに、なおすべての最後の国政選挙は、われわれの分析を確固たらしめる徴候がある。最後の二週間、二つの最後の日曜日に、党は後退しなかった、しかし至る所で党は進歩した、一連の国政選挙であった。すべてのこれらのこれらの徴候は、敵は自分たちが共産主義を殺すことに達したということを信じる時、どのように敵は実際に現実に対して敵の希望をつかむかを証明する。敵は、共産主義を殺した前に、とらぬ狸の皮算用をする(ヴァンドルラポードゥルルス) 必要がないということを学ぶ。大衆の精神状態と釣合って、急進党の意思は、急進党に関して共産主義を強調することを確定的にする。つまり、何の疑いもなく、人民戦線の断絶がないであろうということになる。宣言、ためらい、警戒があるだろう、しかし人民戦線の断絶がないであろう。説明するように試みる必要がある。その理由は、もしも唯単に人民戦線の指導者たちの多数派が重要であったならば、断絶は完璧であろう。説明する必要がある、それは単純である。小ブルジョワジーの大衆は、私が想起したばかりである不安にもかかわらず、大衆の不安にもかかわらず、人民戦線、それは大衆の事業である、そして指導者たちはかつて知った問題よりよりよいことを考え続ける(････)。この事実の検討及び政治局は検討を提出する分析と手を切りながら、われわれの任務は何であるか。人民戦線の成功を保証すること。追求した目的、それはファシズムを避けることであるということを繰り返そう(････)。人民戦線そしてそのようにそれは立派である、それはわれわれの子供である。人々が人民戦線綱領に不足する時、それはわれわれを投票を上げるようにできるだけ一層、人民戦線を想起させる必要がある。それはわれわれの子供であるし、われわれは今言うようにできる想像する義務がない。すなわち、それは他の人たち、共産党員たちである、われわれはただで分らない。その理由は、私はあなたに新しい議論を付け加えるように、確かに、小ブルジョワジーの諸階層の中に、最初のためらいは、必要な、合法的な決定の結果として、国政選挙の直後、政府に参加しないようにわが党の単なる可能なことを到来したからである。それは、労働者運動の利益に及び人民戦線の未来に照応する決定であるし、直ぐ、政府は、小ブルジョワジーの群集において少しのためらいと不安をきっぱり言った。(不参加を説明するため五月に与えられた議論の一つは、しかし、中産階級をこわがらせないような意思がある。

そこで、分析における地滑りがある。人々は困難を克服しようと願う時、困難を認めない必要がない。他の問題、わが党の単なる成功、わが党の単なる利益は、ファシズムを避けるため十分であったということを信ずる、それは、重い誤りになるであろう。われわれの兄弟党、非常に強い、非常に大きな党は、慎重な黨員数でもって、六〇〇万の投票にまで上った大きな影響でもって、われわれ、フランス共産党、われわれは、われわれが孤立した党ではなくて、人民戦線とともに及びその中で偉大な党であるから、わが国に及び国際的なレヴェルについて演じる、役割を決して演じなかつたということを理解するため、ドイツの実例を考へることは十分である。すべてこれらの最後の事件は、人民戦線を救うこと、人民戦線に成功を保証すること、すなわち、現在わが党の役割は何であるかということを実証する。人民戦線は、われわれにとつて、選挙作戦、議会計算ではなかつた、しかし議会のレヴェルについて、当然結果として、大衆の行動及び運動が重要であるということを実証すること。大衆の行動を保証することは、ここで、わが党は避けなければならぬ最初の暗礁の一つである。労働者階級はずっと速く単に中産階級層を目指すことを避ける必要があつた、単に労働者階級と中産階級の間の断絶ばかりでなく、労働者階級の内部に変化、労働者階級の分裂を意味する、労働者階級の内部にマークされた分離を避ける必要があつた。労働者階級の最も進歩した、最も闘争的な部分で、われわれ、共産党と、例えば社会党を後ろに居る労働者階級の一部分。それ故、われわれは言った、そしてわれわれは、われわれが急進党大会に疑いもなく送らう、手紙の中でそれを繰り返そう、われわれは、ストを終えることができる必要がある、と言つた。それ故、現在、労働者階級の経済的諸要求のためすべて闘争しながら諸協約を尊重させるためすべて闘争しながら、経営者の挑戦の中で崩壊しないように用心する必要がある。〔現在のデモは、と、なお M「ト」レーズは言う、ストの結論における、三二年六月の条件のような別の一般的な条件において展開する。六月に、ストは、小ブルジョワジー、小商人たち、職人たちの広い大衆の確かな好感を持つていた……。それは、現在もはやケースではない。われわれは、ケースを理解する義務があり、分裂を生じさせない義務がある。IRM「七」八三。それは、大経営者は、攻撃に出発するため、パリ地方の別の部門を選んだ、最大の特徴の事実である、と、彼に関して、G「モ」ムソオが書く。それは、実は、パリ地方の企業において経験を試したことであり、しかし、それらの企ては、なぜならこの地方は、新高価及び極左主義のうわごとに対してあまり肥沃でない場であるから、失敗した。人民戦線の勝利から社会運動、前掲書。〕ここで率直に話す必要がある。われわれは、目下、ストの運動が発展し続ける問題にどんな利害を持たない。どんな利害！(この発展は、労働組合の仕事の中に離れて着手させないように)勧める、セマールの調停を呼ぶ。人々は、鉄道の中に行動をブレイキを掛けるようにわれわれを責める。労働者たちのもつともな不満は、共産黨員たちと労働組合の責任者たちに反対して裏切らないし、経営者と政府に反対して裏切らない問題に注意を怠らない必要がある。IRM「七」八三、一九三六年一〇月一五日と一六日の中央委員会。もはや人々は、再び工場を占拠する問題でなく、どんな利害大きな勇敢に、フラシオン同志——あなたは、フラシオン同志は決してそれに失敗しないということを知っている——は、工場占拠に関して決定後直ちに書いた、すなわち、『よし、よろしい、しかし工場占拠以外の手段がある。』われわれは、それを繰り返すことはで

きるし、われわれは繰り返さねばならない。(労働総同盟の再統一大会から、理論上は、もはや中央委員会メンバーではない、B「フラシオン」は、一〇月の中央委員会に出席し、例外として、参加する。すなわち、『現在、労働者たちの最も進んだ部分、われわれを話を理解する部分、現在の政府の政策は、われわれをファシズムに誘い込むことができる、有害な政策であるという』ことを考える部分であり、確かに満足していない、満足されていない、やはり、可能性の中に、政府の幾つかのものを手に入れるように信じる、政治的に、最も発展しない部分がある。この状況は、と、彼は続ける、労働組合レヴェルで反響を持っている。ラカモンと私は、集会の中に行動し、労働者たちは経営者たちによって挑発されるのに、ストをしないことがある、理由を労働者たちに説明する。それは、容易でない。しかし、それは、党内に一人だけで巧く行かないであろうだけに一層少なく、それは、一人だけで巧く行くだろう(…)。党は、率直に態度を決める義務がある。労働者たちは、われわれを聴く。少数派を自分を切ることは問題ではない(…)。しかし、なぜなら彼らはジェオローによって操作される、人々は言うであろうという理由で、それは、話すフラシオンとラカモンであることは問題ではない。もしもわれわれはただ一人のものであるならば、人々は改良主義者たちのように考えられるであろう。だが、それは、党の弱体化であろう、IRM—七八三、一九三六年一〇月一五日、一六日の中央委員会)われわれは、一方では、反動と経営者のわなに倒れないため、他方では、妥協しない政策によって滞った構成員たちをびっくりさせないため、それを繰り返さねばならない。それに用心する必要がある。われわれ、われわれすなわち共産党員たちは、われわれをなおこの活動の場に、少なくとも最も少なく、トロツキー主義者たちの民衆を扇動する議論によって影響させないで、この情勢を考慮に入れる義務を持っている。(M「トレーズ」は、人々は、そうするため、もはや『スペインに対する飛行機、大砲』ではなく、権利、平和、国際的協定と集団安全保障の尊重を前面に押し出しながら、スペインに関するスローガンを変える義務があったということを示明する。IRM—七八三、一九三六年一〇月一五日、一六日の中央委員会)それは何も作らない、われわれはその議論を言わせることができる!(…)。それは、原則の放棄を意味しない、否。それは、協力は労働者階級にとって豊かさとして断言した、他の活動の場について協調を意味する。すなわち、一九三四年に同様に、次いで平和のため、再開しながら、民主主義的諸自由のための協力(…)。人民戦線の主要な基礎は、当然プロレタリア統一戦線である。だが、時折、同時に少し忘れられた古い概念、イクトール、統一戦線、それは闘争である。すなわち、統一戦線、それは行動である。すなわち、統一戦線、それはまたは上部の交渉だけでなく、または人々が受け入れなかった、人々が拒絶した非難だけでない。否、統一戦線、それは、その知能を働かせながら、各町村に、各工場に及びあらゆる情況に、いかなる要求、いかなるスローガンは、一定の行動のため、単に共産党系労働者たちばかりでなく、彼らの社会党系兄弟たちも、他の組織の後ろに居ることはできる人々も、広範に動員することが可能であることを探究することである(…)。われわれは、逆に放棄する、われわれは、ますます働くように望むことを想像する必要がない。われわれが指導することの闘争、それは、また統一戦線を実現させるため諸手段の一つである。適当な形態で、統一戦線を作る必要がある。適当な形態で、わが党に反対して攻撃を再建する必要がある。私は、ストラスブルの後(一九三

六年一〇一一日、ストラスブルで発表された演説の時、一九三六年一〇月一五日、『リ、ユ、ニ、テ』紙()、われわれ、カシャンと私は、平価切下げに関して、ファシスト諸団体そして平和に関して、演壇に社会党のミリタンたちによって、端から端まで拍手したならば、われわれの批判を行うのに、向こうに、達したということを感情を持っていた。われわれは、適当な形態の下で、それを作らねばならない。例えば、私は、もしも私は、その辱めた側で論争し続ける代わりに、サラングロが辱めた側を投獄する方が良いだろうことを指摘するならば、社会党系労働者たちの感情に答えるように確信している。すべての社会党員たちは、一致している。続ける必要がある。組織する必要がある。あなたは、現在なおよりよく、なぜ社会党員たち、指導者たちが、委員会に反対して、すなわち、共産党系と社会党系労働者たちの間、直接の接触に反対して、調整委員会、人民戦線委員会であるかを理解する。人民戦線のように困難な時期に、それは、統一戦線に及び人民戦線に委員会の敵意の政策を実現させるのに達するのに十分である。われわれは、すでに存在する委員会、すなわち、調整委員会、アムステルダム・ブレイエル委員会、人民戦線委員会、世界平和連合、婦人委員会、青年委員会を組織し、働かせねばならない。すべての手段によつて、これらの委員会を正常に運転させる必要がある、そして、できるだけ、断絶を妨げるように、あるいはあえて断絶を試みるであろう人々のため、断絶をずっと困難にする及びずっと危険にするように、選ばれた委員会を獲得する必要がある。すべて人民戦線に注意しながら、それは、同時にここで必要である説明である。すべて人民戦線は成功に目指す問題に注意しながら、人民戦線の運命は、レオン・ブルム政府の存在に結ばれるということを考える必要がある。すでに、われわれは、その運命を言い始めた、すなわち、われわれは、誰に何の宣誓しなかった。この主題に、私はボンダイ Bondy に対するこれらの話題を想起させた、そして私は、すなわち、『神もない、カエサルもない、護民官もない』という、コミンテルンのコンビを想起した。われわれは、それはブルムのない、ブルムである、もう終つたと、(人民戦線を)言う、社会党の同志たちを持つている。われわれは、誰に忠実を宣誓しなかった。われわれは、人民戦線綱領の土台について、人民戦線の中で統一した組織で協定を締結した。それは、われわれを心配させる、われわれを関心を与える、そうである。そして、一定の状況において、われわれは、われわれが平価切下げに反対して投票しないと、言つたから、われわれは政府のため賛成投票しようとするから、それは、われわれが政府によって占有されたすべての決定を必ず保証するであろうことを意味しない。もしも、今夜、アルサス・ロレーヌにおける共産党の集会の禁止を承認する必要があると、言う、議会への投票があつたならば、われわれはそれを投票しないであろう。そこに、われわれは人民戦線を言うから、それは、選挙及び議会レヴェルの作戦ばかりでない。人民戦線の他の諸政府、他の社会党議長で人民戦線のような政府、社会党員たちによって支持された及び共産党員たちによって支えられた、急進党員たちで急進党員によって指導された政府があり得る。最後に、^{ブルム}真の人民戦線政府、共産党員たちが居るであろう政府があり得る。(IRM—七八三)。

そして、多数の参加者たちは、特に、労働組合界において、出会った困難を聞いてそれを広める、議論の終りに、結論することをモリス・ストレーズがある。すなわち、『報告の精神、それは、勢力と階級関係の複雑さを考慮に入れることである。人民戦線の団結と成功を保証するため行動すること。この目的の中で、統一戦線の断絶を許さないこと。ますます反対に下部での、共産党系と社会党系労働者たちの間に、統一戦線を補強すること。この政策を支えるため、すべての労働者たちの最も些細な諸要求について、政策を基礎を置くこと。なぜなら、もしも人々が、われわれに反対して、社会党の同志たちによって単に指導された攻撃を見るならば、たとえ人々は、若干の社会党系労働者たちの賛成を獲得するでも、もしも人々が、論争と議論の活動の場について同志たちを従うならば、人々は、すなわち、大衆の中で、この情勢がある・・・という、本質的なものを考慮を入れないであろうからである。それは、われわれが若干の社会党員たちを手に入れたであろう時、大きな大衆はわれわれの方に来ると言うように欲していない。(同上、結論の演説。)^(△)

第五のテーマは、一九三六年一二月の中央委員会である。一九三六年二月一日の中央委員会の時、レオン・モーヴェ・*Léon Mauvais* は、党内に不安のように行動する。『レオン・モーヴェは宣言する、党は、一般的にある安堵で、スペインについて議会グループの態度を歓迎した・・・。』(議会グループは、二月五日、対外政策に捧げられた討論の時、初めて棄権した。)レオン・モーヴェは、『若干の不安、反人民戦線及び必ず反政府(戦線)を変わることができであろう、セクト主義と反社会主義の発展・・・』を指摘する。『細胞の新聞は、ほとんど専ら、ここに、これを実現しない、人民戦線に反対している・・・。すなわち、細胞の新聞は、最後の数カ月の実現を忘れている。企業細胞の中で、同志たちは、多数の月以降、大多数の実現があったということをよく感じる理由で、同じ困難はいない・・・。同志たちは、もつとよりよく、特にラヴァール政府の下、他の諸政府の下に同志たちが今持っている、そして同志たちが持たなかった、色々な可能性を感じている。』(IRM一七八五、一九三六年二月一日の中央委員会。)ラヴァール政府は、共産党員たちに、労働組合市政に・・・、社会党員たちと可能な協調の形態を証明しながら、反応するように訴える。討論の間に参加する、モリー

スリットレーズは(ジットンは、報告者であった)、彼に関して、進行中の経験の性格を再び話題にする。

『人民戦線は、そのすべての生命を消耗したか。われわれにとつて、われわれは、世界を横切つて共産主義の利益の視点で考える、それは問題である。人々は、全国協議会にこの形態の下に問題を提出しないだろう。その理由は、敵と同時に党の同志たちは、問題は従つて提出され得ると、言うことはできるであろう。それこそ、人民戦線は、フランスにおける及び世界における、人民戦線は労働者階級に与えねばならないという、すべての問題をまだ与えなかつた。別の言い方をすれば、われわれは、われわれが危機を越えて人民戦線を進ませ得るであろう、情勢の中に居るであろう(…)。それは、この視点から、人民戦線は、ファシズムがフランスにおける及びヨーロッパを横切つて勝利するその時まで妨げた事実から、現在人民戦線の総決算、それは、われわれが始めから指摘した問題よりもっと数カ月以來認められた、恐らく実現である理由であるし、それは、フランスにおける及びヨーロッパにおける事件の流れを変更した、動向(決定の方向)である理由である。(…)経済的あるいは政治的レヴェルのそして外交政策のすべての問題は、どのようにして人民戦線を発展することに到達するか、という、この問題に、われわれのため、連れ戻される義務がある。それは、これらの基本的な戦術の問題について接ぎ木されそうになる、諸問題を容易にする。ここで、幾つかの観察はそれから由来する。すなわち、共産党員たちは現在人民戦線に直面して生ぬるさを持つことはできるであろう、あるいは共産党員たちは自発的に人民戦線から自分を離すことさえできるであろう、この考えを信用を得させる必要がある。あなたは同志たちをよくそのことを感じるように、私は、ここで、人民戦線の全体は代表する問題について、どのようにして人民戦線はなお与える義務があるか、われわれが人民戦線を理解したように、ファシズムに反対する闘争及び諸自由と平和のために闘争のため大衆連合の大戦術のように、人民戦線は与えた問題について、中央委員会の最後の会議で与えられた分析を更新しようと欲しない。だが、私は、われわれを現われる、かなり重要な若干の小さな観察を想起しようと欲する。先ず第一に、われわれがわれわれの批判を行う仕方、われわれは暗示をもたらず、われわれの批判の形態である。われわれを人民戦線の決まり文句の、財産を収用させないという用心する必要がある。私は、完全に率直に言うことを願う。すなわち、大衆は、人民戦線に結ばれた大衆を、われわれを大衆の信用を保持するため、われわれは人民戦線の先導者たちであるということ、毎日繰り返すことは十分ではないであろう。それは、実はわれわれの固有な経験である。まったくそれでは、もしもわれわれは唯単に言うならば、すなわち、われわれは人民戦線の先導者たちである。しかし、あなたは知っているように、われわれは注目したであろう人民戦線、それは、ここで現在あなたの眼の前である、この人民戦線ではない。もしもわれわれは決まり文句をつかむならば、すなわち、共和制は帝制下に立派であつた。すなわち、人々は、われわれを理解しないであろうし、われわれを忘れるであろう。われわれは、常に政府を指摘しなければならない。そして必ずしも人民戦線政府ではない。この私、私は、この決まり文句、

すなわち、人民戦線政府を決して使用しなかった……。しかし、私はあなたにそれを告白するように、私は、現在そこに、われわれにとつて、それは語呂合わせであることを考える、それだけのことである（アンソポアンセイトウ）。すなわち、大衆のため、語呂合わせは人民戦線政府であるし、共産党員たちは、それは人民戦線政府でないという、現在言うことはできないので、それは、人民戦線政府でないし、それは、人民戦線政府が存在する義務があるう、こんな風にならない！大衆のため、語呂合わせは人民戦線政府である（……）。そして、それについては、実は、語呂合わせが人民戦線綱領を適用する政府であるので、われわれをビュウを話した労働者たち、ヴォークリュズ県の農民たちは、政府を承認する。語呂合わせは、善かれあしかれ政府を適用する。しかし、それは、人民戦線政府である。そして、それについては、実は、人々は、人民戦線に関して共産党員たちの態度自身に非常に注意を集中する。そして、われわれの批判において、われわれの提案において、われわれの暗示において、われわれは、措置を失うことができるであろう、そして、人民戦線の利害によつて専ら指導されなかつたとして、はつきりと現われることができるであろう限りで、しかし、他のプランについてさえ、政府に反対する少しの悔しさあるいは少しの闘争は、われわれの中にはつきりと現われる限りで、最も大きな選択、最も大きな不快があるであろう、そして、それは、実は、とりわけこれらの最後の時間、社会党系労働者たちの間に困難を創り出した、それである。』

外交政策の領域における党の分析の大きな軸を想起した後、そして議会に対する議会グループの態度と証明した後、モリス・ストレーズは、続ける。すなわち、

『反対に、われわれの政策を隠さないで、われわれは人民戦線運動についてそして従つてまた政府について一致している、ある活動の場について動員する必要がある（……）。われわれの戦術、われわれの大衆における表現そして党のイデオロギイ的、物質的な労働の視点から、現在、実は、二つの戦線について、今人々は人民戦線を決着を付ける義務があるということを考える、戦線について、そして、今人々はわが党の独創性と固有な性格を作る、すべての問題を放棄する義務があるということを信じる、戦線について、なおよりよく闘争できる必要がある。すなわち、続けることはできるため、先ず第一に労働者たち、農民たち、サラリーマンたちとの最良の接触を保証する必要があるし、主導権を持つ必要があるし、そしてパリ地方の若干の工場において、人々は、四〇時間制のため政府を感謝する、陳情の名簿を通すかも知れない。すなわち、もしも主導権は、よくしばしば共産党員である人民戦線の当選者に、人民戦線の組織を感謝するためこれらの陳情の名簿を獲得されたならば、結局あなたに反対する、共産党員たちに反対する作戦の問題でないで

あろう。主導権を手に入れる必要があったであらう。誰が署名を拒否しなかったであらう。皆は、あなたに歓迎されたであらう。ルノー家の労働者たちは、例えば、ブルムのお陰で、実は労働者たちは満足を手に入れたということを感じるか。否、労働者たちは、それは人民戦線であるということを知っているし、彼らに対する人民戦線、それは共産党を意味する。しかし、皆はルノー家の労働者たちのように推定しない。(・・・)(その上に)分派がある。それは、なお非常に宣告されない。しかし、分派は、小さい諸要求に対してより少ない注意を認めるのに、存在している。われわれの労働組合の同志たちは、われわれを弁解するであらう。現在、それは、労働組合に関連してずっと繊細な状況である。そしてもしも以前はその全国同盟会議において、われわれの統一労働総同盟は、非常に少しの時間、労働者たちの直接諸要求に捧げたならば、われわれはわれわれの不満を表明したのであらう。一日半の間、スペインについて注意する、議論する必要がある、よろしい、しかし、目下、人々は、経営者の攻撃、生活費に対して賃金の再調整について議論するため一日を当てない。ある危険である。そして、共産党員たちは、労働者の行動の問題は、第二のプランに追放されるであらう間に、もしもそれは、政治的な議論の道においてわれわれを見失うように試みるため、審議された戦術ではないならば、恐らく見るように試みねばならない。同様に、人々は、全国的レヴェルについて、在郷軍人レヴェルについて——それは私が発展させる苦痛ではない、それは明るい——、わが国の最も大きい伝統を代表するすべての問題について、諸要求にもう少しの注意、もう少しの利害を結び付ける。同時に、諸行動の組織がある。人々は、なお行動の諸形態で発見することはできる。労働者階級によって組織し及び指導するため、諸行動があるし、あるであらう。そして最後に、終らせるため、私は、われわれは、各演説における(・・・)、われわれは共産党である、フランスソヴィエト共和制のため闘う党であると、言う、わが党の展望を思い起こす必要があるということを感じる。われわれは、すべての人民戦線を作り上げる。しかし、われわれは、決定的な解決、それは労働者と農民ソヴィエトであらうという、確信を持っている。人民戦線を言う必要があるし、人民戦線を繰り返す必要がある。人々は満足している、あるいは人々は満足していない、それは、われわれを平等である。いずれにしても、誰が、われわれを最も少ない裏切り行為を非難することはできない。(IRM—七八五。)

第六のテーマは、休止後である。三月一二日開催される中央委員会の時、レオン・ブルムは休止を宣言した後、議論は、直接に、先立つ報告なしに、書記局の決定について、開く。セマールとデュビュイは、ブルムの演説によって創られたショックを強調し、党の態度に関して明らかにする、質問を強調する。(党に関して同志たちの恐れ、われわれは、政府の政策の支持における行き過ぎた恐れを表明する、多くの同志たちがいる・・・セマールが宣言する。われわれは現在ある諸要求を支持することができた必要がある。われわれは、政府が身を置く角度から、生活費の値上げに反対して干渉することは、満足すべきではない。

われわれは、政府の無能力を指摘するであろう必要がある。』同志たちは、どこにわれわれは行くか、という、問題を提起させる、と、彼の方では、デュピュイは言う。わが党は、返答する必要がある。わが党は、少しも労働者たちの直接防衛の党の政策を変更しなかったことを証明する必要がある。それは、そこで本質的に労働組合運動におけるすべてのわれわれの活動である。われわれは、労働者階級の直接の及び一般的な諸要求のため闘争の味方であるし、留まる……。諸要求の活動の場は、現在、われわれの反ファシズム闘争における最も堅固な活動の場である。IRM（八一四）すなわち、ルノー・ジャンとヴァサルは、彼らに関して、両方とも、大衆はよく理解された人民戦線政策に結び付けられたことを証明する。（今のところ、共産党に増大した信用があるし、しかし少なくとも同じく、人民戦線に対する完全な信用がある、と、ルノー・ジャンは言う）、そして、ヴァサルが言う、『大衆の中に、人民戦線を維持するような意思があるし、同時に人民戦線の内部に不均衡を誘い込むような冒すことはなく、中産階級とプロレタリアートの間の接触を維持しながら、人民戦線政策を立て直して見るような意思がある。それは、非常に容易な問題ではない』、同上。）『彼としては、ヴァルデック・ロシエは言う、政府とともに完全な一致してはつきりと現われる、われわれを消極的な仕方、で政府を批判しながら孤立する、という、二つの難関を巧みに擦り抜けて進む必要がある。』それは、多数の参加は、ファシスト運動の活動の再発を広める間に、党の行動の不在は、もつとなお少し拡大するように危険にさらすであろう。新しい調子を暴露する、モリス・ストレーズの参加において、同じく敏感な不安がある。すなわち、

『私はほとんど漠然として言うだろう、諸要求の防衛の仕事で満足すること。われわれの共同の敵たちに反対してわれわれの提案を数えるため、人民戦線の大運動の各運動に手紙を作ること。人民戦線の大衆の活動を強化すること。われわれは、失業者の同志たちに言った、すなわち、あなたはデモをすると願うか、ええ、デモをせよ！失業者の同志たちは、当選者たちが彼らの先頭に立つということを願った。当選者たちは、失業者たちのデモの先頭に立たねばならない。他の当選者たちは、デモをすると願うか。そして、彼らがデモをするにもかかわらず！各々の特別の場合に、規則はない。確実である問題、つまり、大衆の闘争性を抑制できる、緩め得る、あるいは打倒するように危険をさらすことはできる問題を、目下、何も作る必要がないということになる、現在、かつてない程、大衆を動員する、『積極的行動主義をする』（アクティヴィゼ）必要がある、すなわち、それは、現在、われわれの体系的絶対的な条件であ

る……。(われわれによって強調された。)それは、暴險を意味しない。それは、人々がまっしぐらに突進しなければならぬということの意味しない……。人民戦線を、人民戦線を構成する大衆の運動をずっと首尾一貫する、ずっと行動的にする問題がある。(IRM—七八三。)

共産党の書記局は、そのように、三月一日、国民議会議員選挙の記念日の場合に、デモ、祝祭と宴会を組織するため、人民戦線全国委員会に提案するように主導権をつかみ、次いで、四月二五日、人民戦線の大デモの組織を提案し、そして、人民戦線の集会和デモをますます手を入れるように人民戦線の意思を確認する。一九三七年七月一四日、最後の場合、大規模で起こるこれらのデモは、もう一度、大衆が、大きくなって行く困難にもかかわらず、人民戦線に結び付けられたことを、デモの大きさによって、なお確認する。(それは、一九三七年七月の中央委員会の時、Mottレーズはそれに与える、解釈である。)すなわち、デモの重さは、その当時、進行中の人民戦線の解体の過程を食い止めることを受け入れることのできる、しかし、元のままではない。共産党は、従ってこれらの月に沿って、人民戦線の成功の必要不可欠の条件を大衆の行動で作った、五月に述べられた路線を放棄しない。(われわれは、諸論文というように、この論文の枠内に、大衆の干渉に關係があるテキストで断固として考慮に入れなかった。ある局面は、単にもちろん共産党の路線の段階を構成する。われわれは、この路線の他の不可分の段階のため、この雑誌の同じ号の中で、ミッシェルマルゲラーズの論文を参照させる。)共産党は、しかし、この四つの中央委員会の急速なざつと目を通すことは、その新しい証拠を申し立てるように、この路線はますます活用するには微妙であるということ、良心にとがめる。共産党は絶対に切るつもりでない、不安な前衛によって要求された、大衆の干渉は(共産党は、特に、労働総同盟の中で、進展及び力關係で支えられた注意をもたらす。『もしも統一された労働総同盟がないならば、われわれの七二名の当選者たちにもかかわらず、われわれは、目方は重くない』と、一九三七年三月一二日の中央委員会の時、モーリスストレーズは宣言する、IRM—八一四。)、もしも共産党はなおその鍵の一つであるならば、結末は一つずつ閉まるようになる、状況の鍵のままである。すなわち、この大衆の首尾一貫した行動は、しかしますます約束するには困難に見える

るし、その行動は少数派の態度をつかみ、本来挑戦の遊びをすることはできるだけ一層、一九三六年初めに結ばれた同盟の中で、裂け目と割れ目を引き起こす。(そのクリシイの事件は、一九三七年三月に、最も明白な実例である。)それは、国内のそして国外のファシズムの圧力は、党はその当時さえ拡大させるように試みる(一九三六年一〇月の中央委員会の時、モーストレーズは宣言する、『わが党の広い団結政策を追跡する』必要がある。『期限のないフランス戦線、すなわち、われわれを成功に導いた、そしてかつてないほど、必要である、ヴィユールバンヌ大会で採択された国民の団結政策がある』、IRM一七八三)、このずっと必要不可欠な同盟を返却する時である。それは、行動戦線か、あるいは同盟戦線か、放棄することよりも無能力に非難することであるので、しかし、これらの二つの戦線の和解は、より複雑な毎日、暴露するので、共産党は、追風に乘って航海する。すなわち、共産党は、『人民戦線の精神を再び活発にさせる』ように余地のある新しい行動の諸形態で思い切って定義して見る、最大多数は自ら提起することはできないため、人民戦線のスローガンを仕上げをし、だが、部分的な勝利だけ勝ち得る。共産党は、重要な提案を述べ、しかし、提案に許すであろう、物質的力になる諸手段を処理しない(あるいはもはや処理しない)。人民戦線政府は、なお存在する。すなわち、最も広い大衆の政治的干渉として理解された人民戦線は、もはややいまい。句切りは、その干渉の中で、政府の次の敗北を持って行く。⁽¹⁹⁾

フランス共産党にとって、人民戦線の経験の成功の条件自体である、大衆の干渉は、六月末から、中産階級の不安を引き起こす。一九三六年五月と一九三七年三月の間に開催された諸中央委員会の分析は、どのように共産党は、党が鍛えるように貢献した、同盟にこの固有な矛盾を管理するように努力するかということ⁽²⁰⁾を証明する。(未完)

——一九八二—九—三〇、草稿——

——一九八三—九—一〇、原稿——

(一) 主な文献は Jacques Kergat, *La France du Front populaire*, Editions La Découverte/Textes à l'appui, Paris, 1986 : 11, K. G. Hart,

- Jr., *The Genesis and Effect of the Popular Front in France*, U. Pr. of American, 1987 : 5, etc. 雑誌『Centre de Recherches sur l'Histoire des Mouvements sociaux et du Syndicalisme (CRHMSS), Université de Paris I, Bulletin n° 8, 9, 10, 1982-1983, 1986, 1987』を総題とわけてみる。人民戦線期は、八号より四種、九号より二六種、一〇号より七号かに五種(修十号、博士論文)もある。外国で七十三種、国内で三三〇種、合計一、〇九二種もある。
- (一) Cf. *Cahiers d'Histoire de l'Institut de Recherches Marxistes (CHIRM), Autour du Front populaire*, n° 24, 1986.
- (二) Cf. Michel Margairaz, *Le Parti communiste, l'économie, les finances et la monnaie en 1935-1936 : le «chaud» et le «froid»*, in : CHIRM, n° 24, 1986, pp. 6-10. Cf. *Ibid.*, pp. 24-27.
- (三) Cf. *Ibid.*, pp. 10-20. Cf. *Ibid.*, pp. 27-35. 第五の付属文書は、拙著『フランス人民戦線論史序説』法律文化社、一九七七年、七七一頁、参照。
- (四) Cf. *Ibid.*, pp. 20-23.
- (五) Cf. *Ibid.*, pp. 3-4.
- (六) Cf. *Ibid.*, pp. 3-4.
- (七) Cf. *Des grèves de juin à la pause, «Le ministère des masses» au cœur des contradictions, Inédits de Maurice Thorez présentés et annotés par Danielle Tartakowsky*, in : CHIRM, n° 24, 1986, pp. 36-42.
- (八) Cf. *Ibid.*, pp. 42-48.
- (九) Cf. *Ibid.*, pp. 48-53.
- (一〇) Cf. *Ibid.*, pp. 3-4.